

平成29年度
参与会報告書



平成30年3月

独立行政法人高等専門学校機構

岐阜工業高等専門学校

平成29年度参与会日程

期 日：平成30年3月9日（金） 14：00～16：00

会 場：岐阜工業高等専門学校 大会議室

日 程：14：00～ 開 会

- (1) 校長挨拶（参与会の趣旨説明を含む。）
- (2) 参与の自己紹介

14：10～ 岐阜高専の現況と課題
（伊藤校長）

14：35～ 岐阜高専の研究・社会連携活動
（和田研究主事）

14：50～ 文部科学省AP事業と進める岐阜高専のICT活用教育改革
（所教育AP推進室長）

15：05～ 年度計画及び自己点検評価に関する意見交換会
（石丸点検評価・フォローアップ委員長）

15：55～ 校長挨拶

16：00 閉 会

参与会出席者名簿

参与

藤原 勉	本巢市長 [代理出席] 副市長 石川 博紀
牛込 進	株式会社TYK 代表取締役会長 (岐阜県工業会相談役)
大貝 彰 議長	豊橋技術科学大学 副学長"
村井 義史	岐阜県中学校長会 会長
柏田 健次郎	中日新聞岐阜支社 報道部長
後藤 宏長	岐阜高専教育後援会 会長 [代理出席] 副会長 大野 悟
古川 一吉	岐阜高専同窓会若鮎会 会長
野々村 修一	岐阜大学 工学部長

岐阜工業高等専門学校 出席者

伊藤 義人	校長
熊崎 裕教	副校長 (教務主事)
和田 清	副校長 (研究主事)
久保田 圭司	副校長 (学生主事)
麻草 淳	副校長 (寮務主事)
石丸 和博	点検評価・フォローアップ委員長
亀山 太一	一般科目 (人文) 学科長
加藤 浩三	機械工学科長
所 哲郎	電気情報工学科長 教育AP推進室長
福永 哲也	電子制御工学科長
吉村 優治	環境都市工学科長
柴田 良一	建築学科長
北川 秀夫	専攻科長
澤田 利夫	事務部長
蒲 美登子	総務課長
山口 敏也	学生課長

■平成 29 年 度岐阜工業高等専門学校 参与会

開 会

【伊藤校長】

参与会は広く学外の有識者からご意見をいただくために設置されたものです。今日の資料の 2 にございますように、参与会規定第 2 条にありますように、本校の教育研究上の目的を達成するための基本的な計画、教育研究活動等の状況、および本校が行う自己点検・評価に関する事項ということで、すべてにわたってご意見をいただいて、高専に対して助言および勧告等をいただけるものと思っております。

今回は、それにプラスして外部評価も兼ねてございますので、後でいただくかたちになるかと思えます。

この参与会組織は、産業界、県、市、高等教育機関、報道機関、本校の教員および同窓会等々の多才な方々から構成されております。

岐阜高専は、全国に 51 の国・公・私立の高専がありますけれども、その中でもかなり活発に活動している状況です。後で私のほうから報告しますけれども、昨年 12 月には全国規模のデザコン 2017 を、今年の夏には全国の高専が集まります高専フォーラムを、両方とも主管校というかたちで開催しました。2 年続けて大きな全国行事をするということで、教職員は非常に大変なのですが、非常に元気のある活動をしていただいております。

今日ご報告いたします活動状況等をご理解いただいて、ご助言をいただいて、今後の学校運営に生かしていただきます。どうぞ忌憚のないご意見、あるいはご質問をいただければと思います。

参与 自己紹介

【議長大貝】

豊橋技術科学大学の 大貝と申します。この年 1 回の岐阜高専の参与会は、これで 4 回目になるかと思えます。毎回、岐阜高専が国立高専の中でも大変頑張っているという話を聞かせていただいて、豊橋技科大にもかなりの数を、3 年次編入で受け入れております。

岐阜高専と豊橋技科大は、本当に切っても切れない重要なパートナーということで、これからも岐阜高専さんにはよろしくお願ひしたいと思っております。

今日は、地元のさまざまな団体、産業界、行政、大学等を代表されて参与としてご出席いただいておりますので、どうか忌憚のないご意見をいただいて、岐阜高専のこれからの発展のために役に立てればと思っております。よろしくお願ひいたします。

【牛込】

株式会社 TYK の代表取締役会長の牛込でございます。私は、つい先日まで岐阜県工業会の会長を 12 年ばかりやらせていただきました。今は相談役という格好でたまには理事会に

出ております。仕事のほうは、まだ現役でやっています、毎朝、会社のほうで7時25分くらいには出ておまして、できるだけ発言はしないように努力はしていますが、どうしてもすることが多いわけです。

そういうわけで、この岐阜高専さんとは、ずいぶん長いお付き合いをさせていただいています。何年になりますか。数えてみると本当に長きにわたりますが、校長先生も何代かにわたってお付き合いさせていただいております。

【柏田】

中日新聞岐阜支社の報道部長の柏田と申します。昨年の8月から報道部長になりまして、自分は初めてになりますが、この資料6にありますとおり、新聞記事で岐阜高専さんの記事もいろいろなところで伝えさせていただいております。今後もしいろいろと扱わせていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

【野々村】

岐阜大学工学部の工学部長の野々村でございます。ちょうど私は、2年前、工学部長を拝命いたしまして、そのときに伊藤先生とどこかの理事会みたいなお会いいたしまして、そこでいろいろと話をさせていただくようになりました。

今、資料を拝見させていただきまして、膨大な資料があつて、活動を活発にされていることを、資料の量から判断させていただいた次第です。中身もすごいのだろうと思って、お話を聞くのを楽しみにしております。

大学も、援助金を餌にいろいろと頑張っておりますが、同じような環境におられるのではないかと、参考にさせていただきたいと思っております。

【後藤（代理大野）】

教育後援会会長の代理で今日はお邪魔いたしました。副会長をやらせていただいております、大野と申します。子どもが今、2人お世話になっております。親目線で意見を言えればと思います。

【村井】

岐阜県中学校長会の会長を務めさせていただいております、岐阜市立加納中学校の村井でございます。

また来年度、県内の中学生が大勢お世話になりますが、どうぞよろしくお願いたします。

【藤原（代理石川）】

本巢市役所の副市長の石川でございます。本日、市長ですが、所用がございまして出席

できませんので、代わりまして出席をさせていただきました。

岐阜高専さんには、本巢の進めております、数学のまちづくりという点で、大変ご協力いただいております。今後ともよろしくお願ひしたいと思ひます。

【古川】

同窓会の若鮎会の会長をさせていただきます、古川と申します。

学校は、建築の1期生で、実質には高専ができて6期生になります。

岐阜高専の現況と課題

【伊藤校長】

それでは、高専のことをよくご存じの方もおられるのですが、初めての方もおられるので、昨年もありましたけれども、高専がどういう位置付けになるかということから始めたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

最初に、簡単に自己紹介をして、岐阜高専の概要、それから最近の岐阜高専の活動です。もっと詳しい内容は、後の副校長と、所教授にお話させていただきます。

私は、現在65歳になりますが、ずっと名古屋大学にいまして、一昨年の4月に岐阜高専の校長として赴任してまいりました。名古屋大学は、21年くらい教授をしているのですが、実はまだ招聘教員で、大学院生に指導しています。この3月で終わりますが、16年くらいずっと図書館長などの管理職をやっていました。今、私は津島市に住んでいまして、2時間以上かけて通勤しておりますが、朝7時半には校長室に入るようにしております。事務が来ればすぐに決裁ができる体制は整えています。

私は、剛構造、特に橋梁を中心に研究をしてきまして、本当に数mm/secから100mmオーダーの全体をカバーしているようなことをやっていました。懐かしいのは、名港トリトンをご存じだと思いますが、名古屋港に3つ斜張橋が架かっていますが、これは20代の前半からずっと完成するまでタッチをしました。名港西大橋は、橋長が名古屋、758mで、完成したときにボックスガーダー (box girder) の中に一晚入って、健全かどうかチェックした思い出があります。

自己紹介は簡単にして、高専の概要です。高専は、工学の工と書いて工専と呼ばれるのですが、実質は違って、高等専門学校で高専というかたちです。工業高専以外にも、商船高専、商船をやっている高専もごく少数ですが、どれもございます。

通常は、高校を出て大学に行くのが普通ですが、中学校を出て高専にというものです。高等教育機関の1つですが、最近では専攻科もありますので、5年の本科と専攻科2年の7年で学士の資格を取って、大学院に行く人もいますし、5年の本科を終わって、大学の3年生に行く人もいます。主として国立大学で、私学にはめったに行きません。

同世代の1%くらいしかいませんので、1学年で全国で1万人、全部で5万人ちょっとです。必ずしも知られているわけではないのですが、日本の高度成長を支えたエンジニアを

養成する機関でありました。

当初は5年だけだったのですが、全国で約4割、岐阜高専は約5割が大学へ進学します。専攻科もできましたし、国立大学にも行きますので、非常に多様性が出てきています。全国で51高専、全国ばらばらにあります。

これは、岐阜高専の目的、教育理念です。あまり詳しくは説明しませんが、基本的に実践的な教育をして、エンジニアとして活躍できる。もしくは、最近は進学もたくさんしますので、研究者になる人もいますし、いろいろなところに多様な出口があるかたちになっています。

学習・教育目標で、倫理、デザイン能力、コミュニケーション能力、専門知識・能力、情報技術。そういう学校の標語をつくっています。

本科は、5つの学科から構成されています。1学年40人ですので、1学年200人で、掛ける5で1000人。プラス、専攻科がありますので、全体で1100人くらい、そんなに大きい学校ではありませんけれども、7年間教育をするところです。

女子学生の比率が非常に重要ですが、最近では20%くらいで、だいたい全国平均です。工学系が多いので、20%というのは、下手すると大学よりも多いのかもしれませんが。非常に熱心な女子学生がたくさんいます。

5学科の紹介です。機械工学科です。非常に分かりやすいと思いますが、機械工学の4力学を非常に重視しています。職業訓練学校ではありません。高等教育です。そういう意味では、変な言い方をすると、うちは本科5年ですので、高校と大学教育を一緒にして、大学でやるようなこともちゃんとやっているという言い方をしています。

電気情報工学科です。これは電気と情報の2コース制です。電子制御工学科です。これは、ロボットとかプログラミング等々を中心にやっています。環境都市工学科です。昔は土木工学科といったのですが、今は改組して環境都市工学科という名前です。非常に社会と密接な分野です。

建築学科です。非常に残念なことに、岐阜大学に建築学科がありませんので、建築の学会の支部も、うちの学校に置かれていますが、非常に人気があります。

学科によって就職先はずいぶん違います。特徴的なのは、環境都市は公務員が非常に多いです。建築は建築分野です。この3学科は、主としてものづくりですが、それ以外にも多様な先に言っています。

これはいつも出てくる求人倍率ですが、非常に高く、学生が少ないので、進路指導は、外から来られるのを断るのが仕事みたいになっています。

5年間の本科は、くさび形授業です。一般科目、教養科目もちゃんとやりますし、専門科目を、くさびのかたちに入れて、高学年になるほど専門が増えてきます。基本技能を身に付けた実践技術者をつくるということで、非常に社会の役に立ちます。大学へ進学しても、頭だけではなく手も動くので、卒論などをやらせると、大学へ直接入った学生よりずっとうまく卒論をやると言われていています。私も、実際にそういう経験があります。

先ほどご説明したみたいに、5年の本科が終わった後、プラス2年の専攻科にも行けますし、国大の3年にも編入して修士を取得します。もちろん大学院へ行けますので、修士、ドクターまで行って、大学の教員、高専の教員になる人も最近は多いです。

先ほども言いましたように、うちは約5割が進学しますが、実質、国立大学へ進学します。通常の高専から大学へ進学するときに、5割も国立大学へ行ける高専はまずないと思うのですが、特にダブルスクール、塾へ行かなくても一生懸命学内で勉強すれば、受かるということです。実際にどんな大学に行っているかということで、28年度の実績です。

進路状況です。非常に申し訳ないのですが、辞退も出ています。大学をたくさん受けますので、クレームがついたこともあるのですが、たくさん受けて、選べるような感じになっています。

これは、学科別の入試倍率です。学科によって変化はないのですが、全体の平均で、最近もずっと上がっているような状況です。中学校の校長先生から、落とされて困ると言われているのですが、非常に人気もあります。

専攻科は、5年の本科が終わった後に2年です。本科のところで卒業研究をやりますが、さらにこの専攻科では、特別研究をやります。JABEEも取っておりますので、技術士などの1次試験が免除になります。ただし、試験を受けても1次試験はほとんど受かりますので、必ずしもJABEEはなくてもいいのかもしれませんが。

ここの求人倍率は本科よりもっと高くて、本当はもっと定員があるといいのですが、なかなか難しい。それで、従来は専攻科が2専攻あったのですが、先端融合開発専攻というかたちで、平成28年、昨年度から改組しております。より融合研究を促進するためということで、5つの本科からいろいろなところに行けるような状況になっています。

最近の岐阜高専の活動で、写真をお見せします。学生は、非常に活発に活動しています、学生は表彰をしております。もちろん、全国にいろいろなコンテストがありますので、それに対して表彰しています。もちろん体育大会もやっています。

これは、私が出てまいりましたけれども、英語のプレゼンテーションコンテストです。シングル部門で2位でした。非常にうまいです。このコンテストは、非常にレベルが高くて、これで第2位というのはすごいです。それ以外にも、デザコンなど、こんな格好です。実際に、優勝だとか、2位の部分をうちが取っております。

いわゆる実践教育ということで、こういうプレゼンテーションコンテストだとか、デザコンだとか、ロケット、こういうもので非常に総合能力を付けるたちで、実践教育をしています。

高専の特徴として、寮生活があることです。寮は、非常に社会常識だとか規律を学ぶのに最適で、なおかつ同一世代の貴重な生活で、自主自立した生活ができるのですが、ともすると、上下社会で先輩は絶対みたいになって、非常に若い学生は耐えがたい環境になることもあり得ます。実際、昨年から寮に関する改革をして、従来、上級生が非常に過剰な指導をする。新入生に非常に過剰なルールをつけて、足音を立てて寮の中を歩いてはいけ

ないとか、ある意味では非常に理不尽なこともいわれるような状況になっていましたので、社会に出て役に立つマナーを身に付けましょうということで、寮生活を全面見直しました。

集団生活のルールは、明示したものだけです。暗黙のルールはありません。先輩が勝手にルールをつくることはありませんよということで、全寮生の共通ルールのみにして、私が寮生の総会で説明して、快適で健全な学生生活を送れるようにということで、直接上級生が指導するという原則で、教員がちゃんと指導します。上級生は下級生に模範を示してくださいという状況になっています。

うちは、そんなに大きな寮はありません。定員が 300 人ちょっとですので、希望すると全員入れるくらいの大きさです。全体で 1100 名くらいいますので、そんなに大きな寮はありません。最近では、特に女子寮が少ないということで、寮のニーズが増えてきていますので、本当は寮を増強したいのですが、残念ながら高専機構はお金がないので、改修はさせてくれるのですが、増強はできません。

寮生活は、会社等や社会から非常に高い評価を受けています。寮生活の中で学生会の役員だとか、学校行事で非常に中心的な役割を果たしてくれます。新入生をできるだけ優先するために、高学年になると、残念ながら入寮は非常に厳しくなることもあります。

実際に設備を見直してしまっていて、エアコンも順調に設置していますし、トイレの改修等も順次実施されています。今年は、男子の風呂の改装をやっています。こんな感じです。非常にきれいにしました。

主な行事はたくさんあります。寮の中で快適な生活をするために、いろいろな行事をやっていますが、非常に自主的な運営をされています。実際に、餅つき大会だとか、バーベキューだとか、非常に学生は楽しんで生活をしています。

現在、岐阜高専は、たくさんのプロジェクトが進行中です。最初はプロジェクトではなくて、産学連携事業と外部資金です。KOSEN4.0 イニシアティブは、文科省と高専機構がやっていますが、これも実際に動いております。国際化を進めるグローバル高専の指定を、高専機構から受けています。

情報セキュリティ人材育成プログラムは、準拠点校になっています。先ほどお話ししましたデザコン 2017、マスタープラン 2017 です。詳しい内容は、和田副校長から説明いただけます。

今年で 4 年目になりますが、教育再生加速プログラムです。AP (Acceleration Program) ですが、文科省がやっています。文科省から直接支援を受けていますが、担当の所教授から詳しく説明いただけます。このプロジェクト自体は、1 件 1500 万から 2000 万ずつお金が出ていますので、お金が来るのはもちろん大事ですが、教職員は非常に大変になる状況です。たぶんこんなにたくさんプロジェクトを持っている高専は、非常に少ないと思います。

ごく簡単に、国際化です。今は短大を入れて 14 大学ありますが、世界の大学と学術交流協定を結んでいます。去年から、ベトナム、中国、マレーシアから受け入れています。

実際に短期留学生で来た場合は、このようなところに連れて行きます。帰るときには、必ずサーティフィケートを校長室で渡しています。

これは、ベトナムのハノイ建設大学との交流協定です。向こうに行って、去年の1月に16名行っています。中国の6大学、ついこの間、ほやほやですが、マレーシアのUTHM大学と交流協定を結びに行っていました。

KOSEN4.0は、中期目標、中期経営計画の第4期が平成31年から始まりますので、今年と来年でそのスタートアップの準備をなささいということで、お金が文科省から来ます。今年採択されました。今、準備中ですが、来年も継続。さらにもう1個、新規に出そうかという話をしています。

これは、今年上がっています、「地域に根ざした次世代を担う課題解決型グローバル人材育成事業」です。後で和田先生が詳しく説明します。

施設整備です。これは、高専の全景ですけれども、うちの施設の担当者が非常に頑張ってくれて、実際にキャンパスマスタープランがあるのですが、更新して、2017をつくりました。ちょっと小さいのでお見せできませんけれども、いろいろな基本方針を立てて、どうするか、将来ビジョンを抜去しています。こういう模型もつくりました。

実際に、前の2013のキャンパスマスタープランに従って、順次改修をして、建築の建物だけが残っていますが、後で出しますけれども、来年度と再来年度で改修が付きまして。

学内は、保護者等が来られたときに非常に分かりにくいということがありましたので、校長裁量経費等をかけて、サインを大々的に更新いたしました。こんな感じで、非常に分かりやすいかたちにいたしました。

先ほど言いましたように、普通は1年で改修なのですが、来年と再来年で、建築の建物部分の改修にやっとお金が付きまして、これで一応全科の改修が済むかたちになります。50年以上たっていますので、本当に改修を速やかにやる必要がありましたけれど、やっとな終わる感じです。

これは岐阜高専だけではないのですが、16歳人口が減ってきますので、そのときにどう対処するかが非常に大きな問題です。国の予算が非常に厳しい状況になっていますので、毎年1%経常経費を減らされますので、それにどうするかということがあります。

実際に今、非常に大きな問題は、高専教育の質保証です。学生の質をどう保証するかで、高専機構が中心になって、いろいろな動きが出ています。アクティブラーニングを導入するというのがありますけれども、共通試験をしてという話もあります。

もう1つは、高専は教育がメインで、研究はその余力でと言っていたのですが、今は、研究費の高度化をきちんとしなさい、教員は教育と研究をきちんとやりなさい、さらに社会貢献ということで、外部資金も確保しなさいという時代になっています。

昨年赴任して、全教員の研究室を訪問して、個別で懇談しましたが、今年度も実施いたしました。非常に先生方は忙しい。教育、研究、学生指導、社会貢献、4項目をやるのが大変だということで、それぞれ非常に課題を抱えておりますけれども、教員の評価制度

を昨年度から確立しました。その 4 項目に関して、どの項目にどれくらいのエフォートをしてやるかを自分で目標を立て、去年のものに対して今年を評価したかたちになります。自己評価をした後、学科長と、最終は私が評価するかたちになります。

高専機構は平成 16 年に設置されています。まだ 10 年ちょっとしかたたないのですが、理事長は谷口功先生で、元熊本大学の学長です。専務理事が 1 名、今、代わられたのですが、残念ながら専務理事に高等教育機関の経験がない人が来られていることと、校長理事が 3 名おられますが、なかなかガバナンスが利かなくて、意志統一が難しいということで、51 国立高専の各校への方針がなかなか徹底されないようなことがあって、非常に課題は大きいです。

岐阜高専自体は、先ほどからお話ししていますように、全国高専フォーラム 2018 と、デザコン 2017 の主管になりました。各種プロジェクトをたくさん持っておりますが、私は、高専機構の企画委員会の委員を 2 年続けております。実は役員会が実質なくて、役員会と合同の委員会になっていますので、採用事項の決定もここでしています。

プラス、情報戦略の推進本部がありますが、その副本部長と、副 CIO と、部門長もやれということで、マスタープラン等々をつくと同時に、全国の高専との意思疎通が非常に悪いということで、今年は 1 年間、毎月、テレビ会議をやっていました。

全国高等専門学校連合会の理事は今年度までで、来年度からは、地区からの代表理事を継続しろと言われております。こういうのをやっている仕事は、岐阜高専さんは、というかたちで言われて非常に申し訳ないのですが、そういう活動をすることによって、先生方、あるいは職員の方の力が増しますので、お願いをして、今後とも活動したいと思っています。

岐阜高専の研究・社会連携活動

【和田研究主事】

先ほど校長からもお話がありましたが、高専の場合は、教育、研究、社会連携ということで、私のほうでは、特に専攻科の教育と、外部資金も含めた研究と、社会連携ということで、お話をさせていただきます。

タイトルには、先ほど外部資金という話がありましたけれども、KOSEN4.0 イニシアティブという事業がありますので、そこを中心にお話をさせていただきたいと思います。

目次を見てください。まず、外部資金の概略をお話しさせていただきます。本校がいろいろなプロジェクトを進めておりますが、特に大型のものが今 4 つ動いております。さらには、その中で KOSEN4.0 イニシアティブということで、そこを中心にお話をさせていただきます。先ほど少し話がございましたけれども、グローバルの点とか、情報セキュリティ、終わりのほうに少し、今年行われる高専フォーラムのお話をさせていただきます。

これはイントロですので、少し省略しますけれども、高専ができて 55 年たちました。昨年は同窓会、若鮎会の設立 50 周年ということもありまして、かなり同窓会との連携も強め

ているということで、非常に学校教育の中で支援をしていただいています。

そういうことで、先ほどお話がありましたように、2000年に入って独法化しまして十数年たちますが、現在は第4期の中期目標、中期計画に向けて、再来年に向けたいろいろな助走期間というかたちで、今年度、来年度にこういった予算が付いています。それを前向きに捉えて、頑張っていこうという話でございます。

これは、過去にもいろいろなインターンシップとか、ネットワーク大学コンソーシアム岐阜、あるいはOB連携でいろいろなことを支援していただいています。さらには、牛込会長にお世話になっていきます地域連携協力会、さらには、いろいろなOBに産官学の連携アドバイザーに入っていただいて、企業との橋渡しをしていただくようなことも、従来から進めてきております。

まず、外部資金の大まかな話だけさせていただきます。本校の特徴は、見ていただきますと、JSPS（日本学術振興会）の科研費を先生方を取っていただいています。さらには、大きいところでは、NEDOの受託研究の大型のものが入っています。共同研究、寄付金等で、企業さんと連携しています。後で所先生にお話ししていただきますが、文科省からは、教育APの外部資金を頂いています。

ですから、岐阜県にとどまらず、愛知県だとか、いろいろなところの企業との連携を、コーディネーターを中心に今、進めつつあるという状況でございます。

ちょっと金額は伏せてありますけれども、全国の51高専の半分より上のところにランキングされていることを、あえて強調しました。左側がトータルの外部資金の金額です。中央が科研費で、1番右側は教員1人当たりの研究費です。岐阜高専トータルでも頑張っていますし、科研ではほぼ10番位で頑張っていますし、教員1人当たりでも、先生方が努力して頑張っているところをお見せしたかったということになります。

岐阜高専の中では、先ほどお話ししましたいろいろな大型の外部資金が動いています。最初は、平成26年度にAP（大学教育再生加速プログラム）が採択されて、いろいろなICTの事業に関わるような施設が整いました。その後、グローバル、情報セキュリティ、高専イニシアティブということで、先ほど校長からもありましたように、いろいろな予算は獲得できるのですが、その分限られた人的な資源の中で、やりくりをしているということでございます。

下のほうは、先ほどから何回もお話ししておりますけれども、外部との連携ということで、同窓会が主体的に、特に公開講座を企画していただいて、岐阜大学のサテライトキャンパスを利用させていただきまして、今年度は計5回行いました。来年度も同じような企画が進められています。

デザコンについては、12月でしたけれども、全国規模のコンペティションを初めて行ったということでございます。

ざっとポイントだけお話しさせていただきました。先ほどもありましたように、地域に根差した次世代を担う課題解決型グローバル人材事業ですので、現在進んでいるいろいろ

なことを可視化するのが大きな目的です。より企業さんとか地域に密着した課題を進めていこうということで、来年度の成果指標としては、いろいろな数値目標が要請されています。

これは、先ほど校長からも説明がありましたが、第4次産業も含めた新産業に、若い学生とも情報を共有しながら、さらには地域の方、OBも含めて、社会で活躍されている方の講演、あるいは、いろいろなことに一緒に取り組もうということです。

もちろん、従来から社会人の学び直しということでリカレント教育は既に進めておりましたので、APでもそうですが、そういったコンテンツをうまく生かしながら、学生の教育にもフィードバックしていこうというのが、大きな流れでございます。

これは、OBの方が中心に行っている中核人材育成塾のコンテンツです。これも2010年から始まっていますので、延べ3000名の受講者がいます。当初は無料でやっていたのですが、今は有料化しても自立化している、全国的でも非常に珍しい事例だと思います。評価も、コンテンツの中身については、8割以上の方が満足していただいている状況でございます。

先ほどお話ししました、OBの方が中心になっている公開講座です。OBの方、本校の建築学科の学科長の柴田先生にも、最後にお話をさせていただくということで、最新の話題も含めて。文系の話題も結構あるのですが、そういったことも含めて、いろいろとコンテンツを提供していただいているということです。

イニシアティブ関連ということで、少し学科の後援会の中に、インダストリー4.0を意識したような、次世代のイノベーションに関わるような話題を提供していただきました。来年度も引き続いて進めていきたいと思っています。

特に環境都市とか建築ですと、スマートシティーだとか、その中には当然ITが入ってくるとか、いろいろなデバイスが入ってくるということで、かなりいろいろなことが、専攻科が1つになった融合ということもございますけれども、そういうことを意識したような取り組みが、今後期待されるということです。

GIS（地理情報システム）とか、最近、Building Information Modeling などでもよく使われているようなことが、デザコンのところでも話題になりました。こういうことを意識して、学生の教育も進めていきたいと思っています。

航空宇宙産業関係では、愛知県、岐阜県はかなり中心になっておりますので、こういったところを、今年度は、中部経済産業局と一緒に岐阜高専から全国の高専に情報発信する取り組みも行っております。

今までのコンテンツを聞くだけではなくて、APのいろいろな支援がございましたので、ムードル（Moodle）を使ってLMSという学習システムをうまく使いながら、彼らの振り返りとか、いろいろなコンテンツの中に落とし込んでいくということで、電子化も進めております。

アンケートとか、フィードバックをちゃんと回しているかということも可視化できるよ

うに、少しずつ回しています。授業では既にうまく回っておりますけれども、授業時間外の授業についても順次行っているということです。

課題解決型。先ほどデザコンという話がありました。もちろんこういったことも今年度やりましたし、岐阜県には、地域の課題を解決するよういろいろなコンテストもあります。そういったことに、新聞記者の方には記事にさせていただいております。非常に感謝いたします。

デザコンも無事終わりました。岐阜駅前だということで、非常に場所も良かったものだから、高知のときは800名少しだったのですが、岐阜で開催したときには1200名を超えるようなトータルの参加者を得たということでございます。

岐阜高専は、まだ、科学技術リテラシーとかこの辺で回しているようなところですが、実は、東京高専だとか、全国高専の中では、社会実装といったところまで落とし込んで回して、結構進んでいます。

今後の課題として、少し社会に導入していく、あるいは、評価を受けて、学校の中だけではなく社会の中で回していく。そのためには、地域とか企業さんとの連携が重要です。そういったことを、これから少しずつでも前に進めていければなと思っております。

グローバルの事業があります。先ほどと同じです。当初はほとんどなかったのですが、牛込会長にもご協力いただいて、TYKのほうにも毎年2名ずつ、インターンシップに行っています。大学との交流も、送り出しもそうですし、受け入れのほうも、JASSO（日本学生支援機構）の支援をいただきながら、着実に進んでいる状況だと思います。

交流協定は、ベトナムを中心に行っています。実は、機構の中でベトナム支援協力校ということで、岐阜高専は第3ブロックの中で関わっています。できる範囲で、こういったところと結んでおりますし、中国とかマレーシアも、今年度は新たに締結したという状況です。これは、先ほど出ました、マレーシアの2月に結んだものです。

岐阜高専としては初めての試みですが、国際セミナーを、3月19日に、岐阜大学のサテライトキャンパスを利用させていただきますけれども、そことホテルを使って、レセプションを含めて、連携している大学と、今回は6大学になりますけれども、本校教員との研究シーズを含めて、教育も含めたセミナーを行う予定にしております。

情報セキュリティです。情報セキュリティも、当然このニーズは皆さんご存じだと思いますので、こういったことを含めて岐阜高専は、第3ブロックの中の石川と、その次で準拠点というかたちに位置付けで行っています。おかげさまで、これで専攻科のいろいろな設備とか、いろいろな情報セキュリティに関わるような環境も整っていますので、ある意味、これから成果が問われるのではないかと思います。

最後になりますが、先ほどお話にありましたけれども、8月20日から3日間、名古屋大学で全国高専フォーラムが開催されます。高専の教職員と、豊橋・長岡の技科大の教職員の方が、教育の質、研究、地域連携を含めたポテンシャルを上げるための全国規模の集会です。こちらも、企業展示とか、いろいろなところでまたご協力いただくかもしれません

けれども、よろしくお願いいたします。

文部科学省 AP 事業と進める岐阜高専の ICT 活用教育改革

【所教育 AP 推進室長】

AP という事業を、文科省から予算を頂いて進めています。ICT という言葉がはやっているのですが、ICT は、コンピューターを使って教育をしていこうという、情報通信が ICT の関係のことです。いろいろな組織がありまして、いろいろな情報を公開しております。これは、去年紹介しました、29 年 1 月の文科省からの調査報告書です。

これは去年報告しました、1 年前の報告ですが、全国的に見ると、日本は最後進国だということ。全世界の 50 カ国くらいを並べてみると、日本は本当に最下位です。その最下位の中で争っているわけですが、ここだけ突出しています。これは佐賀県で、知事とか自治体が頑張っている、全国断トツです。

その中で岐阜高専は、ちょうど去年で全教室が終わって、今年さらにラーニングコモンズというのを含めましたので、この ICT 環境に関しては、全国ナンバーワンになっています。

AXIES は何かということですが、大学の ICT 推進協議会がありまして、まだ若い学会みたいな協議会ですけども、7 年目くらいに入ったと思います。大学でいうと 100 弱でした。去年は 60 弱だったので、だいぶ増えたと思います。企業も 100 弱です。岐阜高専も、伊藤校長から紹介いただいて、2 年前から入っております。

その中で、外国からの招待講演等を聞いてきまして、僕が 1 番分かったことは、全世界の潮流は、次世代の電子学習環境です。これさえあれば、たとえ東南アジアにおろうが、どこにおろうが、全世界でナンバーワンの教育が受けられる。その中でこれから競争していかなければいけない。そういうことがもうひしひしと伝わってきました。かつ、企業が非常に多いというのは、そこに莫大な予算が動くことが分かっているので、たった 100 大学だから参加者 100 人かと思うと、何百人の参加者がいて、そういう話が熱心に行われています。

AP に戻ります。大学の教育を再生し加速する。この AP は、校長が言われていましたように、加速するという意味です。その中で岐阜高専は、ICT 活用を一つのキーワードとして、残したいということです。せつかくの予算なので、残したいなということがあったので、それをやっています。

ICT は、先ほど言いましたように、情報通信技術を活用した教育システムです。LMS という言葉がさっきも出ましたが、学習管理システムです。今までは教科書があって、黒板に書いてというイメージが多かったと思いますけれど、全部電子的になっていて、いつでもどこでも勉強できるということです。全国の大学 500 くらいが参加して、実際に応募したのかは分かりませんが、約 50 大学くらいが通っていると思います。

岐阜高専の特色は、これです。全教職員で教育改革をやるぞということ。失敗する

と何もないことになりすし、うまくいけば絶対全国でナンバーワンになれる、どちらかしかないのですが、僕の意見として、全教職員でということを見視化しています。

結論的にいうと、いつでも、どこでも、誰でも、どんなことでも ICT 活用して、自立能動的に学習をできる環境を整備することを、今やっています。テーマ 1 とか、テーマ 2 とかあるのですが、いろいろなテーマが文科省から指定されていますので、両方を頑張っているということです。

これは去年も見せましたけれども、変な星型があるのが、バージョンアップしたり、新しくなったところです。例えばリモートデスクトップを現在試運転中でありまして、今までは岐阜高専の中では、情報処理センターの CAD ソフトとかを使えたのですが、今年からは、外からでも使える。家からでも宿題をちゃんと、情報処理センターの機器を使ってできる。そういう機能を新たに加えました。

サイエンスコモンズです。岐阜大学の図書館の 1 階が、アカデミックコモンズということで、非常に素晴らしくなっているのですが、そういうものを見せていただいて、岐阜高専としては、学科の特色がかなりありますので、5 学科それぞれに ICT の予算を提供して、コモンズをつくってもらいました。

このところにポスターの B とか、C とか書いてあるのですが、3 月 13 日に公開報告会を岐阜高専で行いますので、そのときのポスターで詳しい紹介があるということです。例えばこれは、LMS の中に入っていたりする前の状態の、僕がつくったコンテンツですが、学内でつくられただけのコンテンツでしたけれども、それをできるだけ外でも使えるようにということで、コンテンツの情報を増やしました。

特に、リテラシー活動とか、国際交流とか、キャリア支援というような活動で、毎年行われておったのですが、記録的には残らない。残ったとしても紙のベースなので、後から参照できなかったのですが、それをできるだけさっきの LMS を使って、電子的に後から使えるようにということをやっています。

今年、新しくやったのですが、プログ (マップログ) というのがあります。AP の全国の報告会が京都であったのですが、全テーマとも基本的にこのプログでやっていました。これは、横軸と縦軸がありまして、リテラシーが横軸で、コンピテンシーが縦軸です。交わっているところが大学生の平均値です。岐阜高専の学生は、ここにありますので、大学生よりもリテラシーに関しては優れている。ただし、コンピテンシーに関しては、大学生と同じです。ライバル校は、明石高専がコンピテンシーについて頑張っていて、明石高専は今ここに来ていますので、岐阜高専でも上がる余地はあるということです。

こちらは、実践技術単位ということで、とにかく自分で好きなことを勉強してこいというので、それを数値化できるようなシステムをつくりました。自分で、今、自分がどこにいるかが分かるというのがキーワードになります。

例えば全学生に対する授業アンケートをしました。今までは紙ベースでどこかに残っていたのですが、今は電子化しているので、どの先生のどの授業が面白かった、良かったと

いうものと、どういうことを直してほしい、こうしてほしいということがあったかを、全部集計して、全教員に可視化しました。

これで、いい授業がどれか。例えば数学の A がいいぞと言う学生がたくさんいることが分かったら、前期と後期に授業参観がありますので、授業参観のときに、いいと言われていた授業はどんな授業か見に行くようなことをして、PDCA をとにかく可視化して回すことを進めています。

例えばこの辺が、新しく今年加わったことです。教室の Wi-Fi を、せつかくあるのだから学生に解放してくれという意見がいっぱい出っていたのです。それを即座に解放し、学生の半分以上が使っています。ほんのちょっとしか変えていないのですが、こうやってやると登録できるよということで、ほとんどが使っています。

これは、各教室に電子黒板を入れたのですが、学生が自分でシステムをつくり、自分たちが、何曜日までにどんなことをやらなければいけないよと、自分たちの必要な情報だけを可視化して、非常に見やすくしています。学校だと、25 クラス全員分の情報を可視化しているので、よく分からないです。でも、これは、要る部分だけを可視化しているので、非常に分かりやすい。しかも、これが家からでも見られるという素晴らしいシステムです。

これは、先ほど和田先生からあった中核人材育成塾です。このコンテンツも、先ほどのあれで徹底的に電子化しております。もちろん岐阜高専の学生もこれを勉強することができるのですが、今後の展望としては、外の人もこれを使うことができるということです。

このときに 1 番何が問題かという、科目です。科目というのは履修生というのがあって、登録する必要がある。いちいち登録したりしなければいけないので、それがめちゃめちゃ面倒です。それで考えた作戦は、自分が登録できるものです。自分で見たいものを登録すると、中へ入って行って、コンテンツが見られる。

コンテンツを勉強したら、できたかどうかを調べたいのですが、それが、さっきからよく出ていた CB というやつです。これでコンピューターを使って、自分で中身を確認してみて、勉強がちゃんとできたかどうか、こういうのが問題として出てくるんだなというのが分かるということで、要は今つくり込みをいっぱいやっています。

1 月 19 日、岐阜大学の教育推進学生支援機構というところがあり、岐阜大学の優れているところは、SD・FD といいますね。普通、FD といって教員だけがやっているのですけれども、スタッフデベロップメントも含めて、しかもそれを先に置いているということで、教職員が一体となって岐阜大学は、教育改革をやっているぞということが、ここに出ているのです。

そのときに、富山大学のたぶんハシモトという教授が質問されました。この教授は、AP の全体報告会で京都にも来られていて、やっぱり質問されました。教授の質問はこれでした。学生は、高校でいっぱいアクティブラーニングをもうやった。大学ではアクティブラーニングをやりたくないぞと。大学の教授で、もう何十年も前からアクティブラーニングを推進してきたのだけれど、もうアクティブラーニングの推進活動からは手を引きたい。

有名な高校、大学の先生が、有名な先生にこういうメールを送ってきたと言っているそうです。

やっぱり大切なのは、自立能動的な学習のはずが、やらされ感とか使命感で疲弊するとまったく逆効果になってしまうことがあるので、このことは、僕もちょっと意識しがてら、岐阜高専内での ICT 活用教育を進めていきたいと思っています。

まとめますと、岐阜高専は、学生も教職員も全員参加型で教育改革。それをすぐ可視化し改善する。教育課程には、岐阜高専は手を加えていないです。ほかの学校の AP とかは、教育課程も変えています。ということは、教育課程自体は、自由に岐阜高専の意志で変えることができる。せっかく 50 周年を迎えた岐阜高専には、立派な OB の方がいっぱいいますので、OB の社会経験を若手に伝える。こういうことをうまくやれば、岐阜高専の教育改革が進んで、AP に対する答えになるのではないかと考えております。

意見交換

【牛込】

まず、伊藤校長から話がありました寮生の問題は、大変、私はいいと思っています。実は、企業側から見ますと、社会性に欠けた学生が結構入ってきます。それが最近増えてきているような気がします。社会性の中に、人との付き合いができないのが多いです。私は、全寮制度を前から何回も申し上げているのですが、できたら全部の学生を寮生にしてもいいと思っています。高専機構から、そういうのはあまりされないという感じですが、できたら、私が高専機構に行っても、この話をしたいと思っています。

それはどうしたらいいかというと、前に申し上げたことがあるのですが、先生方はご存じだと思うのですが、アメリカにボーディングスクールというのがあります。これは、非常にエリートの中高一貫の学校です。アメリカ全国で 360 校くらいあるのですが、パーセントにしたら 0.3% くらいで非常に少ない学校です。

そこでは文武両道で、完全な全寮制度でやっています。英国のパブリック・スクールに多少似たところがあるのですが、アメリカのほうがもっと進んでいるのではないかと考えるのは、最初から社会のリーダーをつくることを明確に表しているわけですから。そして、文武両道で、親離れ、子離れは非常に厳しくやっています、年に 2 回くらいしか親は会っていない。寮に持ち込むものは非常に制限されるわけですから。先生方も、実はキャンパスの中に住んでいる。ですから、学校での授業以外に、日常の生活の相談にも乗っていただける学校です。

そこで優秀な成績をあげますと、アイビーリーグへ入っていくわけですから。アイビーリーグへ入りましても、その人たちは同じ寮へ泊まるのです。ですから、完全なエリートづくりをしているのですが、エリートづくりがいいかどうかは別問題といたしまして、私は、アメリカの教育を支えているのが、この全寮制度のあるボーディングスクールではないかと、思うくらいです。

ですから、高専機構さんと一緒になって、実際にアメリカのボーディングスクールを 2、3 校見に行かれるといいなと思っております。本当に欠けているのが社会性でございますので、学問の勉強ももちろん大切だと思いますが、そのほかに社会性、道德等の問題は、日本の将来をつくることにつながっていくのではないかと思います。

2 番目でございますが、最近、われわれの企業でもそうなのですが、AI、IoT に非常に力を入れています。プロジェクトチームをつくりまして、導入を熱心にやっています。第 4 次産業革命が起きつつあるのではないかと思うくらい、非常に重要なことではないかと思っています。これに遅れてしまうと、国全体が遅れてしまうような、既にだいぶ遅れつつあるような感じがいたしますので、IoT、AI を意識した教育プログラムを考えていただけるとありがたいと思います。

3 つ目でございますが、最近の傾向として、デザインが非常に大切ではないかと思っています。デザインというのは、単なる本当の意味のデザインだけではなく、考え方そのものです。ソフトの面でのデザインの問題が、非常に重要であるような気がいたしております。

あくまでも私ども産業界から見た目で申し上げていますので、一方的なところもあるかもしれませんが、そんなふうに思います。

【伊藤校長】

最初のような話は、非常にそうだと思うのですが、高専機構はお金がないということで、新設は一切まかり成らんといったかたちで、概算要求を出させてくれないのが現状です。ですけれども、各委員会でそういう話も出ますので、したいと思っておりますけれども、留学生との混合寮です。改装して混合寮にするのは非常に積極的ですので、うちもそれを機構に出そうとしています。

AI だとか IoT だとか、今日、所先生にもご説明いただきましたけれども、機器もそろいましたし、クラウドにも入っています。

デザインは、まさにうちも一つの重要な視点になっていますので、今後とも充実したいと思っております。

【牛込】

私の会社は、入社すると全部、寮に入れています。わざわざ寮をつくっています。

【伊藤校長】

そうですね。お金があればぜひとも。うちも、少なくとももう 1 棟か 2 棟は。要するに希望者が増えてきていますので、特に女子が入りたいと言うのですが、残念ながら高学年は出て行ってくれみたいな話になっているので、ずいぶん怒られています。

【野々村】

先ほど牛込会長さまが言われましたデザイン思考教育に対して、われわれの大学も、これが非常に重要だと思って取り組んでおります。現在は、昨年できました自然科学技術研究科の中に、デザイン思考教育に取り入れて、学長主導ということもありますが、デザイン思考を産業界が取り入れておられる、そこの専門の方を呼んで、講師として招いてやっております。

デザイン思考がいいなと思うのは、しゃべれない子がすぐに見つかる。コミュニケーションができない子が、すぐに見つかるというので、グループの中に入れないのです。PBL (Problem Based Learning) もたぶんそうだと思いますのですが、PBLにもう1つデザインというのは、課題を見つけるところが違います。そこでかなりいろいろな学生さんのキャラクター、特徴を捉えて、うまくいいアイデアを出す自信になる、発表できるところがかなり違ってくるなと思って、導入した価値はあると考えております。

平成31年からは、博士課程にデザイン教育を導入して、研究の中にデザイン思考を入れて、自分の研究を設計するところに入れております。

ただ、現在対応できていないのは学部でございまして、学部では表現、相手の話を聞くというレベルの低いところで止まっている。将来的には入れていこうと考えております。

これがデザイン思考の話でございますが、国際化を進めておられますけれども、その予算はどのようにされているのですか。かなりいい学生を呼んで、先方と行き来していろいろとやるときには、予算がかなり伴ってくると思うのですが、その点はどのように工夫されているのでしょうか。

【伊藤校長】

基本的に、短期留学に関しては行くほうも、受け入れるほうもが、文科省のJASSOという組織がありますので、できるだけそこに支援を受けるようにしています。それがなくても来たいという学生もいますし、行きたいという学生もいますので、やっています。高専自体は、1000万以上のお金が毎年来ていますけれども、学生には直接渡してはいけないことになっているみたいで、非常に厳しい中、それでも国際化を進めているところです。

一つ特徴的なのは、留学生が、来年度からですが、タイのチュラポーン王女サイエンスハイスクールで、王室が全額お金を出して中学・高校をやっていますけれども、その中学の卒業生でいい人を毎年10名ずつくらい、日本に呼んで、日本語教育も含めて1年生から入れるものがありますので、国策でもあるのですが、かなりタイとは進めています。

【野々村】

おそらく短期留学ですと、日本人の学生が国際化の端緒に就くというレベルのところだと思います。その次のフェーズは、留学生を受け入れて、5年間一緒に日本人と教育をして、国際的な感覚をどちらにも身に付ける。それから、日本フリークの日本を好きな海外の学

生を育てて、将来的に産業、つまりこの岐阜高専の卒業生の方が海外で活躍するときに友達を、ベースをつくる場所につながっていくのではないかと思うのですが、そうしたときに、おそらく授業料免除とか、そういうのはかなり効いてくると思うのですが、そういう計画は、何か考えておられますか。

【伊藤校長】

長期のものはなかなか難しく、例えばマレーシアから来ますけれど、マレーシア政府が奨学金を払います。あるいは、モンゴルとやっていますのは、向こうと文科省が両方やっていますけれども、大々的にお金が来ることはないです。どちらかという、大学側で将来は自費で来てもらって、逆に学位をもらいなさいと。先ほどお話ししました、学校法人のタイのあれも、タイ政府が全部授業料を払うのだそうです。こちらの生活費も、7年間一貫で払うそうです。

【野々村】

われわれのところもそこを今工夫しております、英語での授業を行って、学位を取るところも進めております。そういう学生に対しては、授業料を一切取らないという決断をして進めております。そうしますと、学生はいい人が来てくれますので、何かご参考になるかなと思って、紹介させていただきました。

【伊藤校長】

大変うらやましいです。体力があるので、そういうことができるので。うちがそれやると干上がってしまいます。

【議長】

たぶん学校の規模が違うので。わずかな数であれば、授業料なしでもいけるかなと。豊橋のようなどころとか、岐阜高専、1000人、2000人規模の大学だとなかなか難しいところで、その影響力が大きいということです。

年度計画及び自己点検評価に関する意見交換会

【点検評価・フォローアップ委員長】

本校の点検評価・フォローアップ関係の取りまとめ役をさせていただいております。

今回お渡ししました、資料7になるかと思います。その中に、岐阜工業高等専門学校年度計画および自己点検評価と題しました、A3サイズの紙が入っているかと思います。

これは、事前に参与の先生方にお配りさせていただきました。今までは行っていなかったのですが、今回、参与会のほうで、外部評価の項目も取り込ませてもらいたいということです。今までコメントをたくさんいただいて、本校がどういうふうなかたちでやって

いて、われわれ自身の努力を評価しているわけですが、それについてどうであるかを、数値でご評価いただきたいということで、今回、参与会の先生方をお願いしたいということで、盛り込ませていただきました。

それに先立ちまして、先にこの点検評価の表をお配りさせていただいております。字ばかりで、とても量も多く、読むことも大変だったかと思います。少しだけでもお目通しいただければということで、送らせていただいております。

この内容に関しまして一つ一つ説明していくわけにはいきませんが、26年度から28年度、昨年度までの計画、その実績についてまとめたものです。29年度は、今月も半ばあたりまで来ていますので、過ぎているところではございますが、29年度のところは、一部この中に入っている部分もあるのですが、昨年度までの計画に対する実績がどうであったかをまとめたものでございます。

機構のほうからだいたいの指針は示されるのですが、本校独自で学科ごと、組織ごとに目標を年度初めに立て、年度末にその目標に対してどういうふうに対応できたか、どのような成果が得られたかを自己点検している次第です。

これは、26年度から28年度までをまとめたかたちになっておりますが、これを見ていただいて、実際にどういうことなのか、どういうことを意味しているのかとか、こういうことはぜひこういうふうにしたほうがいいのではないかというようなコメントがもしあれば、ここでご披露いただくと大変ありがたいのですけれども。

なかなか難しいところではあったかと思いますが、事前にちらっと目を通していただいた範囲内で構いませんので、左側が年度計画になります。当初立てた計画。そして、それに対して実施はどうだったのかというものが、右側の列に書いてあるものになっております。

今、この席には関係者がすべてそろっておりますので、ご質問があれば、関係する教員のほうで対応させていただきたいと思います。もしご意見、コメント等がございましたら、いただければと思います。

こちらのほうから3人の先生方にお話しいただいたのですけれども、それも要するに一種の計画と実績ということにも関わってきます。これは26年度から昨年度までの話になっておりますので、それに続いた話が今あったということで構いませんので、今まであった話も含めたかたちで、コメントをいただいても構いませんので、よろしく願いいたします。

【議長】

あらためて今日、校長先生の説明に始まって、今の年度計画の話まで来ましたけども、全体を通して感想でも構いませんし、ご意見でも構わないと思います。

【古川】

少なからずこれを見させていただいたのですが、内容としては、目標に対して、完全に

実施されておるわけですね。ですから、これを見る限り、例えばアンケートでは、非常に優れているところに丸を付けざるを得ないのですが、例えばそれに対して具体的に。

例えば、私は一つありまして、さっきの話も関連して質問があるのですが、卒論生が学会発表をしているかどうか。それも一つの評価としてあると思うのです。いろいろなことをされている中で、うちの学生は、卒論を書いたら、必ず指導教員と連盟でもって学会発表しますよと。そういうことが一つのかたちとして現れると、ものすごく分かりやすいと思うのですが。これを見る限りは、アンケートで非常に優れているという。

例えばそういうことに対して、これから先、高専としては、先ほどの点検も関わり合ってくると思うのですけれど、どの程度のレベルまで上げていくかということですね。その辺はどうでしょうか。

【和田】

今、専攻科の場合だと特別研究といっているのですけれども、JABEE等がございまして、専攻科の場合には、全員が学会発表を行うということで、実際に学会発表の優秀賞だとか、国際会議でいろいろなポスター発表等の表彰を受けております。

実は、先ほどグローバルというお話もしましたけれども、今の1年生が、今度2年生になった4月に、それぞれの研究発表を、ポスターで発表して行く。新たな試みですけども、そういった意味では、少しずつそういったことを意識して行くということは、専攻科については行っています。

本科についても、教授がご担当ですけれども、各学科で英語によるプレゼンを少しずつでも行おうということで、昨年度から行っている状況です。

【古川】

人文関係もすごく一生懸命やっていたらしゃることは分かるのですが、ちょっと余談に近い話をするのですけれども、私は高専を出た後、就職しまして、その間に名工大の教員をさせていただいて、そのときにいろいろ学んだこともあったのですが。

そのときの一緒にいた友人が、県の部長をやっていたりしたのですが、彼と話す中で、高専生はすごく優秀だと。優秀だけれども、管理職としては使えないと。そういう話の中で、彼が言うには、高専教育の中に何かあるんじゃないかということです。公開講座をすればすごく優秀な人たちがいっぱい来て、経営者もいっぱいいますから特異かも分からないのですけれども、おしなべてそういう傾向があるのではないかということをおっしゃられたのです。

例えば、今の話の中でも、研究者とか技術者は育つのですが、上になったときに人を扱えるような、そういうシステムではない気がします。例えば一般教養も含めた、そういうものが何かあるのではないかとずっと思っていたのです。

先ほど牛込さんが言われたように、全寮制という話も一つだと思うのです。私も寮にい

たのですけれど、寮のときには、1年生で入ったら8人部屋とか10人部屋とか。その中でだんだん上級生になると、2人部屋とかになって。そういうシステムがあったのですが、今は個々の寮になっている。そういうのも含めて、全体的に一度考えていただくのも必要ではないかというのが、申し上げたいことです。

【所】

先ほど紹介しましたこのプログというのは、実は管理職になるためにどういうことが足りないかを調査する指標の一つです。先ほど言いましたように、岐阜高専は、リテラシーは非常に進んでいるので、大学生よりも上なので、能力はある。しかし、人を使ったり何かをするときのコンピテンシーに関しては、大学生と同程度なので、能力のわりには管理職に向いているかなと言われるわけです。

コンピテンシーとか、リテラシーをどういうふうに測って、どうやってそれを改善していくかが、当然その後にあるわけですが、その前にまず自分で勉強していかないといけないですね。そういうことも含めて。それができるかどうか、このグラフなのですが、文科省のAPの目標は、週に20時間自分で勉強しろとっています。大学教育は、そんなものだと思います。

岐阜高専の1年生から5年生は、1、2、3、4、5と何とかクリアできてきたという感じがありました。これは去年だけの話かもしれないということで、今年の学生の速報値ですけども、ここに来ていました。ということで、順調に4年生が5年生になったということなので、何とか頑張ってきているということなのです。

しかし、まだこれでは自分で勉強しているかどうかだけの話で、さっきの話について、よく分からないところがあります。そのことを頑張っているのが、これはAPの報告会、13日のプログラムなのですが、このところに明石高専があります。

明石高専は、地域と協働で作業を行う。2年生と3年生と4年生の、4学科3学年を全部通して、Co+workをやらせて、これでリテラシーが3から4に上がったと言っています。どういう取り組みをするかという話は、今日の緑の報告書の中に、全国の高専の最も優れた取り組みをしているところから、センター長を呼びまして、こういうことをやったら、それが上がったぞというのが分かるわけです。

このことを岐阜高専の全教職員に知ってもらうことが一番大切だと判断して、全国で最も優秀な成果を上げている取り組みの内容を、3月13日に岐阜高専で発表してもらって、かつ、1時間の質疑応答の時間をポスターセッションというかたちで残しています。

僕は、発表だけを聞いてもあまり意味がないと思うのです。そのときに質問して初めて、自分のところに吸い込むと思うので、ポスターセッションのときにも、彼らに来ていただいて、1時間、岐阜高専の教職員などと話し合ってもらって、今言われたようなことに対して、どういうふうに取り組んだらうまくいったかを可視化していきたいと思います。

【議長】

今の話は、大学を卒業した卒業生が企業に入ってから、しばらくたってから指導的立場になったときに、どうもちよっとというような話が聞こえてきます。そういう意味で、今日の所先生のブログという可視化の話は、僕も初めて聞くような話なので、うちの大学でも取り入れられたら、少し参考にさせていただけたらと感じた次第です。

【牛込】

私も実は経験しています。経験談です。私も実はエンジニアでございまして、エンジニアは、普通、会社へ入りますと、課長くらいまではものすごく間に合うのです。特に高専から大学へ行って、うちに入ってくると非常にいいのですよね。非常によろしいのですが、残念ながら課長から上へ行こうというときに、工科系の人たちはだいぶ障害があるのです。

ですから、どうしたらいいかという、文系の学校との交流があるといいと思っています。これを私は盛んに言っているのです。例えば名工大の先生方にも言っているのですが、名古屋大学のような総合大学ですとやりやすいですけど。しかし、そうではなくても、あえてそれをやるようなことを考えるべきではないかと思います。

【藤原参与（代理石川）】

高専さんにはいろいろとお世話になっておりまして、一つだけ私のほうから紹介したい話題がございます。

先ほどあいさつの中でもお話しさせていただきましたが、数学のまちづくりを本巢市が進めておるところでございますけれども、お手元のほうにお配りさせていただいております、『本巢本』をもしよろしければご覧いただければと思います。

この本は、市に入庁3年目・4年目の職員が実際に取材しながら、自分たちで写真を撮って、構成してつくった本で、1週間ほど前によくできた本でございます。この中に3大特集ということで、田舎暮らし、ジビエの「森のごちそう」、それからもう1つが、本巢は数学の町ということで、3つを特集で挙げております。

この本の12ページをご覧くださいますと、数学のまちづくりでございます。なぜ数学かといいますと、世界的に有名な数学者の高木貞治博士が本巢市出身ということで、これまで数学によるまちづくりを進めてきたわけでございます。今年、高木貞治博士記念室をリニューアルオープンします。今まで公民館の1室に少し資料が置いてあっただけだったのですが、富有柿の里へ場所を移して、リニューアルオープンさせます。イメージ図がございますが、こういった施設をつくって、この3月29日にオープン式典をするということで、現在進めておるわけでございます。

もう1枚めくっていただきまして、14ページ、15ページとございますけれども、ここにあるのが本巢市で行っております具体的な数学のまちづくりでございます。算数ウオークラリーです。小学校5年生が、算数の問題を解きながらウオークラリーをするようなこと

で、この日はたくさんの参加がございました。

その下に行きますと、算数・数学甲子園です。これがなんと今年で第 20 回でございます。毎年、市内市外の小中学生、小学校 5 年生から中 3 の子どもたちが参加しておるわけでございます。ここの中で、試験会場として、この高専さんの校舎を借りて行っております。また、その問題についても、高専の先生に作っていただいたり、ご提供いただいています。また、当日の試験官も同窓会の若鮎会の皆さんにもご協力いただいて、行っておるわけでございます。

今年が 400 人ほどの参加者がございまして、半数が市外から来られる子どもさんでございます。今、お知らせ等で大変ご協力いただいておりますということでございます。この 29 年度からは、15 ページにございますような数学校ということで、さらに子どもたちが算数に興味を持って、もっと難易度の高い問題を学習したいということに対して、ジャンプアップ学校ということで教室を開いたりしています。その下に、算数・数学検定学校というのもございますけれども、検定に合格するように、それぞれ学校を開いて、小中学校に教えて学習の機会を与えているということで、120 人ほどの参加もあったということです。

いろいろと行いながら、数学のまちづくりを進めておるわけでございますけれども、こういった中、大変高専さんにはお世話になっているということです。今後ともご協力いただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

【村井】

最初の学校紹介の中にも出てきましたが、本当に素晴らしい人材を育てていただいておりますことにつきまして、送り出す側として敬意を表しますし、感謝を申し上げたいと思います。

この 2 ページのところ、入学者確保に関する事項がありまして、ここにも記載されているわけですが、中学校へ来ていただいて、受検や学校紹介について、生徒向けの出前講座を開講していただいていることに、誠に中学校長会として、大変ありがたいという声をたくさんの校長が申しております。

また、推薦入試に関して、例えば 2、3 年の成績ですとか、生徒会の役員をやったら加点があるとか、明確な公表がされているということで、受験生にとって分かりやすいとか、大変丁寧な入試に関する説明がなされていることについても、校長から、大変ありがたいという声を聞いております。この場でお伝えしておきたいと思います。

【柏田】

手前どもの話で恐縮なのですが、昨年 4 月に入社した新人記者に、岐阜高専さんの出身者が 1 人おります。岐阜高専で 4 年学んだ後に、同志社大学の入試を受けて合格し、そこを卒業して、昨年うちに入社されました。岐阜高専さんの出身者で、編集に入るのは非常に珍しいパターンで、それが、つい先ごろですけども、来月から岐阜支社の報道部に配属

されることになりました。

彼が、岐阜高専さんのことについて話を聞いたところ、非常に自由な校風で、なおかつ専門的なカリキュラムが非常に充実していて、それが自分に培われたと言っておりました。その上で、あえて言うとするならばという話を聞いたところ、人文科目系でいうと、4年制大学に行くと覚悟してやっていくときに、そこにより注力する部分が必要かもしれないと思ったと言っています。

今日、この自己点検評価の部分も見させていただいて、さまざまな努力をしていることもございました。例えば外国語についても、岐阜高専の先生が監修されている、『COCET』という理工学系の必修英単語の冊子が非常に有益であったと言っておりました。

そういうものも、積極的に活用していただきたいと言っておまして、いずれにしてもカリキュラムの余裕がない中かもしれませんが、人文系の充実も図っていただくことは、より高めるためにも必要ではないかと言っておりました。

彼は新人で、まだ顔も見えていないのですが、2、3 会話をしただけでもすごく知的レベルが高いことがうかがえる存在です。先ほど文系の大学の教員をしているとおっしゃっていましたが、彼の場合は、たまたまですけども、途中で自分の将来像を変えて、つまり技術系から新聞記者という文系の仕事に就く、非常にバランスの取れた人材ではないかと期待しているところもあります。

そういう意味でも、この高専をさらに、彼の目を通じて、またうちのほうの発信も、これから岐阜に配属になりますし、岐阜高専の在り方についても、さらにいろいろ情報発信できるかなと、私も思っているところです。

【古川】

若鮎会の会長をさせていただきまして、卒業生といろいろ公開講座の話の中で、決して苦言を呈するわけではないのですが、くさび形教育で、教養課程のところ専門が入ってくると、専門に追われてしまうので、教養なんてやっている暇がないと。だから、どちらかという学生の中では、どこかに教養をおろそかにする気持ちがあったと言います。

その辺で、例えば何か一つ、休憩みたいなところをつくっていただいて、先ほどの会長のお話ではないですけども、文系に対して興味を持つと。これはある人にお話を聞いたのですが、例えば商社の方がヨーロッパとかそういうところへ出張に行って、パーティーなんかがあるときに、まず彼らが興味を持つのは歴史だと。そのたびに、日本には元寇が2回来たよね。1回目と2回目はどこが違うのと。そういう質問をするそうです。そうすると明確に答えられない。そうすると、彼らはその商社マンに対して、こいつはレベルが低いのだということも言われるそうです。

そうすると、高専教育のくさびの中で、どこかにちょっとゆとりを持っていただいて、そのくさびにわずかな隙間でも空けていただいて、そこで人文とか文系をたしなむとか、興味を持つ。そういう時間を取っていただけると。なかなか難しいと思いますけれど、要

は 5 年間で大学教育の専門課程を私もやってきましたけども、大変だと思うのですが、そういうことも入るような余裕がどこかにあるといいと思うのです。

【牛込】

実は、私はエンジニアを卒業してから、すぐ文系の大学に入ったのです。自分でどうも視野が狭いなとつくづく感じていましたので、あえて行ったわけですが、それは非常に良かったと思っています。

ですから、そんなことをやらなくても、交流があると非常にいいような気がします。

【後藤（代理大野）】

勉強する環境、先生方のレベルアップをしていくにも、いろいろと環境整備等々が要る。それには当然お金が要するという中で、資金の状況という中に、共同研究ですとか、寄付金。これは、当然企業からというのがあろうと思うのですが、環境を整えていくにはお金が必要ですけど、いろいろお聞きしていると、国立大学の皆さんも、研究費がたくさん出てこなくて厳しいと。

そういう中でお金を集めていく中で、本来、高専の先生方が進めているテーマとずれてしまうようなことはないのですか。その辺、本来の専攻科とかそれぞれの科のやっておられることと、企業から求められている共同研究のテーマとのずれはあるのですか。

【伊藤校長】

難しい問題です。アメリカだと、お金の出る研究しかしないのがアメリカ流ですが、日本はそうはいきません。産学連携といっても、要するに研究で企業と先生のテーマをマッチングしてということですので、先生が全然自分のテーマ以外のことをやることはまずありませんし、本当の意味での施設整備だとか、環境に充てられるほどのお金は、残念ながら来ません。

施設整備は、明らかに高専機構だとか、文科省にお願いして、概算要求でしないと、大規模改修も残念ながら自前ではできないというのが、学生数が 1500 人くらいの学校の現状です。例えば国立大学だとすると、どこかの企業から何十億円もらって建物を建てるとか、研究所をつくることはやっていますけれども、残念ながら、うちはそこまではいかないです。

【議長】

今日の伊藤先生の説明の中に、外部資金といいますか、科研と受託と共同研究とあって、共同研究の割合が、まだかなり小さかったのです。今、うちの大学の例でいうと、共同研究をかなり重点的に進めようとしていまして、まさに民間企業と大学が一緒になってということですよ。

ただ、そこで、これからの共同研究の在り方として、企業の組織と、高専（大学であれば大学）。組織対組織で協定を結んで、組織として共同研究を推進するやり方。そのときに、直接経費プラス間接経費。間接経費を3割頂こうという考え方で進めつつあります。

従来は、シーズとニーズをマッチングさせて、先生方が直接企業とやりとりしながら、企業対教員というかたちの共同研究がほとんどだったと思うのですが、これからは組織対組織というかたちでの共同研究が主流に。その中でインターンシップもやるし、人材の交流を進めていくことで、より産学連携が進んでいくのかなと思っているところです。そういう取り組みを、大学でも始めています。もし参考になればということです。

【伊藤校長】

非常に参考になりますけれども、岐阜高専は、まだまともなほうなのです。積極的にやっているほうで、包括協定を結ぶようになったときに、高専は規模が小さいのです。先生方も、ある意味では専門がばらばらなのです。例えば助教で採用した人も、一人前にやってくださいという時代です。

かといって、高専のいいところでもありますので、若い人がきたら、教授の言うことを聞かなくても、自分の好きな研究をしてよろしいとなっていて、研究費もそんなに差はつきませんので、いいところを伸ばしてやるということです。

企業のマッチングは、地元の地区だとか、地区を外れてもいいのですけれど、現実には難しく、学校は敷居が高いみたいです。

【議長】

非常に頑張られているのはよく分かるし、いろいろなプロジェクトを複数並行して実施されていて、先生方はそちらに取られる時間が非常に大きいのかなと危惧していますが、その辺はどうなのですか。

もともと高専の先生は、授業があつて、学生の指導があつて、そういった中の空いた時間で自分の研究も少しずつやってみたいなパターンだと思うのですけれど、そこに外からお金を取ってきて、いろいろなプロジェクトを実施していくということで、相当に負荷がかかっているのかなと気になったのですが、その辺はいかがですか。

【伊藤校長】

実際、高専の先生は、クラブ活動の面倒を見て、土日もどこかに遠征に付いて行くとか、寮の宿直があるとか、普通の大学の先生に比べても、そういう意味では負荷になります。ただし、学生との接触が非常に密接です。先ほどご説明したみたいに、評価制度の各項目で、自分の得意なところを大きくして、積極的に全体で成果を上げる努力はしています。均等に皆さんやりなさいというと、かなりオーバーフローしてしまって、できない先生も出てくると思いますけれども、今は、私個人としては、いい方向に向かっておるのではない

いかと思います。

外部からのアプローチで刺激がありますので、中だけで自分では取りに行けませんので、そういうものに関して、計画的にいろいろなことができるようになっていきます。外部資金もちゃんと取れる人もいますので、そういう意味では、自由度は逆にいうと、今の大学は非常に厳しいのをよく知っていますけれども、高専はもっと自立的に好きなやり方ができるのではないかと思います。

私は、上から目線なのかもしれないのですけれども、できるだけ過剰にならないように、配慮はしています。

【議長】

大学は、文科省からの予算がどんどん削られていて、大変な状況の中で、外部資金を取って。今、国立大学全体では、一応下げ止まったのですけれども。下げ止まったのです。ただ、ここに来て景気が徐々に良くなって、人件費が徐々に膨らみ始めているので、総額は変わらないけれど、人件費が上がっていくと、またきつくなってくる。そういうパターンに陥りつつあるということです。人件費が上がった分だけ、ちゃんと文科省が上積みしてくれればいいのですけれども、そうはいかないところで、問題は簡単ではない。この間、長岡の経営協議会があって、そこである外部の先生が、長岡技科大に年間予算がある程度ある中でも厳しいので、それに対してあといくらあったらいいかと言うので、長岡の学長先生はプラス 10%と。

それを国立大学全部に積み上げると、だいたい 2000 億プラスです。今、国立大学全体の年間予算が 1 兆円です。プラス 2000 億ということは 2 割か。2 割増になれば、何とか国立大学も普通に運営ができるのかなと。ただ、普通に考えれば、2000 億なんていう話はどこからも出てこないのです。無理な話なのですけれども。ちょっとこれは余談というか、高専とは直接関係ない話です。

【点検評価・フォローアップ委員長】

点検評価関係で、一緒にお配りさせていただいております、13 項目の項目の評価シートがございます。5 が非常に優れている。1 が判断保留というところがございますが、前もってお配りしましたこの資料と、今回、私どものほうからいろいろ発表させていただきました内容も含めまして、ほぼこの番号に沿っております。1 番から 8 番までで、1 の 1 の 1 の各学科、専攻科の目標となっておりますので、その項目をまとめたかたちで、全体的な評価をいただければと思います。

それに対するコメントがございましたら、右側のほうにお書きいただければと思います。ずっとその項目ごとに評価をいただくと、全部で 13 あるかと思います。ちょっと大変かもしれませんが、ご評価いただければありがたいです。

係のほうからメールでまたこの表を配信しますので、それに書いていただいて、返信い

ただければありがたいと思います。もし今書けるという方がいらっしゃいましたら、この場で回収させていただいても構いませんが、もう一度吟味いただいとすることで、メールで返信いただければありがたいと思います。

閉 会

【伊藤校長】

国立大学は下げ止まったということですが、実は、高専は下げ止まっておりません。経常経費がだいたい10%ずつ削られています。

ただし、全体予算でいくと、実はずっと上がっているのです。いわゆる紐付き予算になって、プロジェクトにお金を付けて、頑張りなさいと。

だから、善意からすれば、それによって活動が活発になると思いますが、現実には、たぶん半分くらいは疲弊している方向に行っているかたちで、通常経費はどんどん無くなっていく非常に厳しい状況で、人件費率が、計算の仕方によって違うのですけれども、高専機構全体で8割を超えるということで、5割を超えたら民間企業はやっていけないとよく言われますけれども、非常に厳しい。大学でいうと、教育大学がだいたいそれくらいです。工学系の大学は、4割から5割ですが、非常に厳しい中で、それでも社会の要請に応じてということで頑張りたいと思います。

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
1 業務の質向上に関する事項		
1-1 教育に関する事項		
1-1-1 各学科・専攻科の目標		
1	<p>人文科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ○共通:豊かな人間性の形成と幅広い教養を修得させることで、人間的・社会的素養を備えた実践的技術者を育成するとともに、多様な国際社会で社会人として生きる市民としての資質を育成する。 ○国語:客観的なテキスト読解を踏まえた口頭発表や文章作成を通じて、他者との相互理解に資する円滑なコミュニケーション能力と、教養の基礎となる自国文化への関心を育成する。 ○社会:社会的現象の探求を通して、次代を担う技術者・社会人として必要となる社会的知識・技能の修得を図るとともに、健全な批判精神によって裏打ちされた倫理的資質を育成する。すべての社会系教科目で授業・課題(レポート等)・定期試験を通じ本目標の達成に向けて尽力する。 ○外国語:国際社会で技術者として必要なコミュニケーション能力の育成、及び、異文化・異言語理解と言語認識を育成する。 	<p>人文科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ○基礎的な文章読解能力や文章作成能力については1～3年次の国語科目の全てで取り組んでいる。また、4年生全学科の総合国語では全学生を対象にプレゼンテーションの機会を与え、コミュニケーション能力の向上を図っている。 ○すべての社会系教科目で社会的知識・技能の修得、批判精神に基づく倫理的資質の育成を考慮できている。具体的には、第1学年地理では問題集の活用やレポート作成、第1・2学年の歴史や倫理では学生のノートテイクの状況の定期的なチェックや長期休業中の課題作成、第3・4学年の政治経済や法学では論述課題を課すことを通じて、目標の達成に具体的に取り組んでいる。 ○表現力養成のための指導としては、英語の各科目で英作文の指導を従来より増やしている。
2	<p>自然科学目</p> <ul style="list-style-type: none"> ○共通:地球環境、生物への重要性に配慮し、現代に対応出来る地球科学、生物関連科目を取り入れることを検討する。 ○体育:ヘルスプロモーションの考え方のもと、健康の保持増進に関する知識を深め、さらに自主的に運動する能力や態度を養う。また、安全管理に対応した学習として、自転車交通安全について・熱中症予防について・救急救命について、計画し学習に取り入れる。 ○数学:e-ラーニング科目「数学アラカルト」の講義配信を行い、大学編入学試験をPDFファイルにてホームページ上に公開する。また、国立高等専門学校学習到達度試験向けと学力アップのために3年生に課外に特別問題集を配布する。実力数学検定試験の校内団体受験も実施する。 ○化学:原子や分子の微視的概念を通して、正しい物質観を身に付けさせる。さらに、グローバルな人材を養成するため、重要な技術用語を英語で表記し、発音記号も併記する。また、アクティブラーニングの手法を取り入れ、双方向の授業展開によるよう努める。 ○物理:基礎的な知識を組合わせて、既成の知識にとらわれずに問題を解決できる能力を養う。そのために、H27年度に引き続きアクティブ・ラーニングを取り入れる。また、「ニュートリノ」や「重力波」など、科学の発展を身近に感じられる最新の話題を多く取り入れる。 	<p>自然科学目</p> <ul style="list-style-type: none"> ○共通:物理、または化学の授業時間に、特別枠として、地球科学、生物関連科目を取り入れることを、平成30年度実施に向けて計画中である。 ○体育:アクティブラーニング手法を取り入れ、具体的な健康の保持増進の学習に取り組んだ。また、安全管理に対応した学習についても、実技方式で行う内容も取り入れ、より具体的に実施した。 ○数学:「数学アラカルト」の講義配信、PDFファイル化した大学編入学試験のホームページ上での公開を行った。また、学力アップのために、3年生に特別問題集を配布した。さらに、実力数学検定試験の校内団体受験も実施した。 ○化学:重要技術用語の英語表記等を含め、計画通りに授業を展開した。特にアクティブラーニングを意識した双方向の授業展開となるよう、学生へ質問を投げ掛けながら授業を行った。高度なアクティブラーニングは、カリキュラム上展開しにくいという課題がある。 ○物理:アクティブラーニングを意識して、学生参加型の授業を多く取り入れた。また、物理の最新の話題についても、多く取り入れるように努め、実行した。
3	<p>機械工学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ○創造的で自ら考えられる学生を育てるという産業界の要望に応えるべく、工学実験・工学基礎研究・卒業研究の実施内容について見直しを図る。 ○実践技術単位制度を踏まえた機械工学科ポイント制の見直しを進める。 ○コモンスペースを有効活用するため学生が自学自習を支援する場としての整備をする。 ○一般学科と協力し低学年の物理・数学の学習支援を推進する。 ○大学編入学を目指す学生の学習支援を行う。 ○機械設計技術者試験(3級)・技術士一次試験などの資格取得を推進する。 ○夏季休業を利用したインターンシップを第4学年学生に実施する。 ○モデルコアカリキュラムを踏まえ、学修単位を取り入れた教育課程表を作成する。 	<p>機械工学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ○工学実験・工学基礎研究について実施方法を学科内で議論した。そして、機械工学基礎研究と卒業研究とを連続のものとし、機械工学基礎研究は卒業研究の準備段階としてとらえることとした。また卒業研究配属方法の内規を見直した。卒業研究中間発表の実施方法を見直し、学科の研究室を3つのグループに分けそれぞれのグループ毎に発表を行うようにした。これにより、1人当たりの発表時間を増やすことができ、十分な質問時間を取ることで発表の充実化を図った。卒業研究概要の図は英語表記とした。 ○機械工学科ポイント制については本学科ポイント制度を本校で採択された教育AP事業の実践技術単位制度へ移行することを検討した。そしてポイント表の見直しと整合性について確認した。 ○コモンスペースを有効活用について、教育APの予算での整備を検討した。 ○豊田高専機械工学科の例をモデルとして低学年での基礎科目支援に専門学科教員が関わる方法を検討した。 ○大学編入学を目指す学生の学習支援を行うため、夏季休業中などに編入学試験の模擬試験を実施し、指導を行った。 ○機械設計技術者試験(3級)・技術士一次試験などの資格取得を推進するため、2回の模擬試験を実施した。また、各教科毎にサポート教員を配置した。その結果、機械設計技術者試験(3級)に20名、技術士一次試験(機械)に6名の合格者を出した。 ○第4学年を対象にインターンシップを実施し、8、9月に30名が参加した。 ○学修単位を取り入れた教育課程表を学科で検討し、平成29年度入学生から適用を開始する教育課程表を作成した。
4	<p>電気情報工学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ALの活用はもちろん、LMSの活用など、情報系を専門とする教員を含む学科として、ICT活用教育で学内トップの実績を目指す。また、AP事業や科研など、外部資金を積極的に獲得しつつ、学生教育の改革と質的改善を進める。特に現役学生と卒業生の活躍を可視化し、広報にも努める。 ○シニアOBを含む卒業生とも積極的に連携し、高専の技術者教育の質的向上に努める。これらにより、学生のキャリア教育を学科として体系立て、さらに充実させる。 	<p>電気情報工学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ALの活用はもちろん、LMSの活用など、情報系を専門とする教員を含む学科として、ICT活用教育で学内トップの実績を目指す。Mathcadの活用を開始した。また、電気回路シミュレーションソフトiCircuitの2017年からの導入と活用を開始した。以上については、AP事業や科研など、外部資金を積極的に獲得しつつ、学生教育の改革と質的改善を進めている。特に現役学生と卒業生の活躍を可視化し、広報にも努めるため、学会学生向け講演会を1月と2月に開催した。 ○シニアOBを含む卒業生とも積極的に連携し、高専の技術者教育の質的向上に努めている。特に企業技術者一押しコンテンツの入門CBTについて、学生の試行を開始した。キャリア教育を学科として体系立て、より充実させるべく学会発表を含めて可視化した。
5	<p>電子制御工学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全ての授業科目でアクティブラーニングを実施する。 ○学生が自学自習を進めるための、プリント・Webページ・電子資料等の整備を進める。 ○低学年から工学の教育に親しむために、リテラシー教育に参加学生をつくり、リテラシー教育を推進する。 ○低学年での研究室見学を実施する。 ○国際的に活躍できるエンジニアを育てるために、卒業論文の一部分を英語化する。 ○卒研発表を1名以上の学生に英語で発表させる。 ○OBによるキャリアプラン講演会を開催する。 	<p>電子制御工学科</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全ての授業科目でアクティブラーニングを実施している。 ○各授業で自学自習のためのコンテンツを適宜用意している。また、資料の一部は岐阜高専LMS(moodle)で学生が利用できるようにしている。また学科の共有フォルダを整備し(学外非公開)、学生に必要な情報をサーバーで管理できるようにした。 ○平成28年度では ○リテラシー教育実習に1年1名、2年1名、3年4名、4年2名、5年2名(計10名)参加した。 ○12月12日と1月16日の特活において、1年生の研究室見学を実施した。 ○卒業論文と予稿について、図表のタイトルを英文とし、要領へ記述した。 ○5年生1名の英語による卒研発表を実施した。(英語による発表学生は英語の予稿と日本語の予稿を提出した) ○12月9日にOB/OG5名を招いて、1名につき20分程度の話と最後に学生からの質疑応答を行い、大講義室でキャリア講演会を実施した。

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
6	<p>環境都市工学科 ○環境都市工学は、人類が自然災害から国土を守り快適で安全な生活を支えるための社会基盤の整備と、自然と共生・調和し環境負荷の低減を考慮した「循環型の都市づくり」の創造に関する基本的な知識・考え方を理解し、人類の持続的発展を支える社会基盤整備を積極的に推進できる能力を身につけている技術者に育てる。 そのために、平成27年度は具体的に以下の教育・支援を行う。 ①OBによるキャリア支援教育：実務を経験した卒業生により講演などをおとしてキャリア支援を行う。 ②インターンシップ：原則、夏季休業を利用し、4年生全員時に校外実習を体験させる。 ③公務員試験、資格試験等の援助への支援：ゼミ等を開催する。また教室に資格関係書籍等を常備する。 ④共同教育：他高専と共同して講演会あるいは見学会を実施し、情報交換等を行う。 ⑤地域への情報発信を推進する。</p>	<p>環境都市工学科 ○平成28年度での具体的な教育・支援に対する進捗状況は以下の通りである。 ①OBによるキャリア支援教育：1年生は授業（シビルエンジニアリング入門）のなかで計6回計画し予定通り実施、4年生は授業（総合演習Ⅰ）の中で随時計画し14回（1回の授業で複数社を含む場合有り）実施、3年生は特活の時間に随時計画し4回実施した。また、5年生に9回、2年生にも2回実施した。現場見学会も、1年生2回、2年生1回、4年生1回、5年生5回実施した。特に4年生は11/18に岐阜高専建設技術士有志会の協力によりOB等11名により、全体講演と公務員、民間の二グループにより座談会を実施した。 ②インターンシップ：4年生全員が夏季休業中に校外実習を行った。 ③公務員試験、資格試験等の援助への支援：現5年生に対しては適宜実施済みで、次年度（現4年生に対して）に向けて12/17に4年生を対象に公務員模擬試験を実施した。また、10/9に実施された技術士1次試験には3～5年生多数が受験し、3年生15名、4年生7名、5年生3名の合計25名が合格した。（平成27年度から資格試験を援助するために1～3年生の教室にエコ検定の問題集など、3～5年生の教室に技術士1次試験の対策本を配備している。） ④共同教育：4年生が1/13に豊田高専環境都市工学科と合同で名古屋高速公社の見学会を実施した。また、教員は同じく12/2に豊田高専環境都市工学科の教員と就職状況や基礎学力向上対策などについての情報交換を実施した。 ⑤地域への情報発信：主に中学生を対象に9/24オープンキャンパス、10/29-30高専祭公開日に環境都市の部屋により本学科の取り組みについて情報発信を行った。また、今年度夏季休業中1-4年生の学生27名が母校を訪ね情報発信した。さらに、卒業研究の取り組みを1/24に糸貫中学校全2年生に、2/22に神戸中学校全3年生に紹介した。</p>
7	<p>建築学科 ○平成24年度補正事業による施設整備費補助金を活用して構造系、計画系、および環境系施設に導入した実験機器や情報機器を教育的に有効活用し、教育の質の向上を図るとともに、より優れた実践的な技術者の育成を推進する。 平成28年度では以下の通りとした。 1.構造系分野 ・鉄骨構造Ⅱにおいて、単調載荷試験による実大試験体の曲げ挙動の検証をする。 2.計画系分野 (1)教育内容の充実(質) 「デジタルデザインⅡ」と「設計製図Ⅱ、インテリア設計Ⅱ」で課題設定を共有することで、グラフィック関連ソフトの実践的な操作技能修得を目指す。 複数科目が連動した複合的な授業や課題内容の部分的実施を検討する。 (2)演習時間の確保(量) 設計製図(1～3)、デジタルデザインⅠ・Ⅱ、インテリア設計Ⅰ・Ⅱの各科目で授業および学生のCAD室での自習状況を具体的に把握し、CAD室を有効活用する方策を検討する。 3.環境系分野 恒温・恒温室について、環境工学に関わる実験[建築工学実験Ⅱ(4年次)]の1課題の実施運用を試みる。その上で、特に運用面の問題点を抽出する。</p>	<p>建築学科 平成28年度では以下の通りとした。 1.構造系分野 2月1日(水)に第4学年の学生を対象として、RCおよびPC梁実大試験体の単調曲げ載荷試験を行い梁の曲げ挙動を検証した。 2.計画系分野 【教育内容の充実】：グラフィック関連ソフトのより高度な操作技能修得のための課題を実施した。複数科目で連携した課題については、例えばデジタルデザインⅡで修得した高度なスキル(具体的には動画作成)の建築図面への展開の難しさ等を把握した。 【演習時間の確保(量)】：建築学科棟改修計画案にCAD室に導入されているグラフィック関連ソフトが自習可能な室を盛り込んだ(ただし、改修は平成30年度以降に持ち越された)。 3.環境系分野 恒温・恒温室について、環境工学に関わる4年次の前期授業「建築工学実験Ⅱ」の1課題(室内温熱環境の快適範囲等)で活用することができた。ただし多人数で使用した場合においての恒温・恒温室の運転能力不足が問題点として挙げられた。</p>
8	<p>専攻科 ○改訂した判定方法による入試を実施し、その結果から制度の妥当性を検討する。 ○海外インターンシップ事業(派遣、受入)を実施し、学生のインターンシップ参加、短期留学生支援に対する単位化を行う。 ○学修総まとめ科目(特別研究2)により、学生一人一人に専攻科における学修の総まとめを行わせる。 ○創造工学実習などにおいて、学生主体の問題解決能力とチームワーク力の育成を図る。 ○新専攻による特例審査を受審し、各専攻区分における専門科目の充実を図る。</p>	<p>専攻科 ○改訂した判定方法による入試を実施し、その検討結果から次年度も同様の判定方法とすることを決定した。 ○海外インターンシップ事業(派遣15名、受入18名)を実施するとともに、学生のインターンシップ参加、短期留学生支援を国際連携実習1・2として単位化した。 ○学修総まとめ科目(特別研究2)により、学生一人一人に専攻科における学修の総まとめを行わせる。 ○創造工学実習及び特別実験において、出身学科の異なる学生チームでの課題への取り組みを通じて、学生主体の問題解決能力とチームワーク力の育成を行った。 ○新専攻による特例審査を受審し、全ての専攻区分において「適」の認定を受けた。</p>
<p>1-1-2 入学者確保に関する事項</p>		
9	<p>・適切な入試実施への取組計画 ○平成28年度入学者選抜より導入したマークシート方式用に策定した実施要領の改良を図り、監督業務、採点業務とも適正に実施できる体制を見直す。 ○入学者選抜方法(推薦、学力)の見直しが必要ないか再検討する。 ○推薦入学者選抜においては、面接を実施し、志望動機、あるいは学科への適合性等を評価する。 ・志願者の質の維持及び志願者確保のための取組計画、入試広報の実施計画 ○中学校(190校)の進路指導主事を訪問し、1)高専教育の概要説明と2)入学者選抜方法の詳細を説明する。 ○依頼のあった中学校には進路説明会に赴き、志願者層と保護者に直接、説明する。また、依頼を促す文書も中学校に送付する。 ○年度を通じて10回程度の入試説明会を実施する。 ○中学校の進路指導者や塾の講師を対象とした『進路指導のための岐阜高専入試説明会』を実施する。(10月) ○9月に『オープンキャンパス』を開催する。 ○10月に『入試説明会・学校紹介in高専祭』を実施する。 ・女子学生志願者の確保への取組計画 ○広報冊子『岐阜高専学校案内』について、『きらきら岐阜高専ガールになろう』の頁を設ける。 ○高専機構本部による発行冊子の『キラキラ高専ガールになろう』を中学校訪問時に配布・説明する。 ○入試説明会や進路説明会の際に活躍する女子学生や岐阜高専OGを積極的に紹介する。</p>	<p>○適切な入試実施に向けて、昨年度版の監督者業務要領、採点業務要領を基に岐阜高専に適合した実施要領を策定した。また、マークシート読み取り機の動作確認や取扱い説明会についても実施した。 ○推薦入学者選抜においては、志望動機、あるいは学科への適合性等を評価するため、面接を実施した。 ○推薦入試については調査書点と面接点の割合、学力入試については調査書点と学力検査点の割合を見直す必要性について継続して検討中である。 ○入試広報については、平成28年度では、中学校の進路指導担当教員訪問(192校)、オープンキャンパス2016(参加者600名)、入試説明会(全8回全て終了)、『入試説明・学科紹介in高専祭』(参加者：入試説明会156名・学科紹介630名)の行事を実施し、入学者への広報を図ってきた。また、『学校案内2016』を発行し、中学校訪問、入試説明会、中学校主催進路説明会、オープンキャンパス2016などの際に配布した。 ○学校案内2016より、『岐阜高専ガール』の頁を設けた。また、オープンキャンパスの広報チラシ、岐阜高専の広報ポスターにも、女子学生の記事や写真を積極的に採用し、女子学生が活躍する状況を女子中学生にアピールした。 ○入試説明会や進路説明会の際にも、活躍する女子学生や岐阜高専OGを紹介した。</p>

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
1-1-3 教育課程の編成等に関する事項		
10	<p>・中長期(5～10年程度)の高専の将来構想、教育課程の改善の検討及び必要な措置 【本科】 教員の負担軽減、社会のニーズに合った学生の育成を目的に新規学修単位の導入も含め、科目構成を見直した新教育課程について検討し、平成28年度中に完成させる。 【専攻科】 ○グローバル高専専攻科への取り組みを開始する。 ○従来の二専攻を大括り化した一専攻の運営について、専攻科共通で取り組むべき内容と、従来の二専攻別で取り組むべき内容(特別実習報告等)との区分を明確化する。</p>	<p>【本科】 ○本校LMSや機構本部によるブラックボードを活用できるように、ICT活用環境を整備した。1～5年の全教室(5学科、25教室)後部に対し、黒板からホワイトボードへの置き換えを完了した。また、電子黒板機能付きプロジェクタを導入し、無線LAN環境も整備された。ICT機器に関する講習会を定期的実施している。 【専攻科】 ○グローバル高専専攻科への取り組みを開始し、特別研究の英語発表に関する概要を決定した。 ○一専攻の運営について検討し、特別研究審査報告会、特別実習報告会、進路指導を含めた担任業務のみ従来の二専攻分担で実施することを決定した。</p>
11	<p>・専攻科の充実を図る計画 ○大括り化に対応した専攻科1専攻の新教育課程を実施し、改善点などを抽出する。また、JABEE審査、特別審査などの外部評価を含めた対応策を検討する。 ○既存の設備、専攻科科学等再編推進経費による設備更新などにより、新領域研究3グループおよび基礎工学研究グループの学内・学外連携を進めて、社会・産業・地域ニーズを反映した研究を行う。 ○グローバル高専専攻科(拠点校)により、第3ブロックで共有化できるリソースを検討する。また、海外交流協定大学との短期留学派遣や受入などを継続し、特別研究を英語でプレゼン発表するなどを通じて、グローバル人材の素養を涵養する。</p>	<p>・専攻科の充実を図る計画 ○専攻科改組によるJABEE継続審査の認定を得た。 ○大括り化に対応した専攻科の新教育課程(1年次)を実施した。また、民間企業の外部講師による授業を展開した。 ○各グループ長を中心に教育研究プロジェクトの準備を進めた。 ○専攻科入試においてTOEICスコアを入試判定に導入した。 ○専攻科科学等再編推進経費より、新規設備購入、リースレットの改訂、Web動画の制作などを行い、大括り化する新課程や専攻科の魅力を実証した。 ○創造工学実験のPBL成果として、INPITのバリエーションコンテストにおいて優秀賞(出願支援対象)に選出された。</p>
12	<p>・英語方向向上に関する取組計画・学修到達度試験の活用計画 【本科】 ○英語の授業以外の専門科目において、英語の使用機会を増やす。 ○第3学年全員が実施しているTOEIC試験の結果を、英語科目の成績評価に反映させるに際して、その寄与率についても検討する。 ○数学と応用物理の各科目について、成績評価における学習到達度試験の成果の寄与率を検討することにより学生の動機づけを図る。 【専攻科】 ○全専攻科生のTOEICスコア向上のため、TOEIC IPテストを複数回実施する。 ○TOEICスコアの専攻科入試での活用について本科学生に周知し、TOEIC受験の動機づけを図る。 ○特別研究2において英語能力の評価を実施する。 ○特別研究テーマ・学会発表実績をWeb公開する。</p>	<p>【本科】 ○英語で卒業研究発表を実施した学生を表彰する体制を継続する。また、数学、応用物理については、学習到達度試験の成果を成績評価に反映する寄与率の検討を行い、現状の寄与率を維持することになった。 【専攻科】 ○TOEIC IPテストを平成28年度では7回実施した。 ○TOEICスコアの専攻科入試「英語」への換算点について再検討するとともに、入試ガイダンス等において本科学生にその内容を周知し、TOEIC受験の動機づけを図った。 ○検討した結果、英語能力の評価は特別研究2よりも特別研究1の方が適切であるという結論に至り、特別研究1英語発表の概要を決定した。 ○特別研究テーマ・学会発表実績をWeb公開した。</p>
13	<p>○前期末及び後期末の最終授業において、授業アンケートを実施し、結果を授業担当教員へフィードバックする。 ○在学生による授業評価を適切に反映させるために、授業評価結果を公表する。</p>	<p>○前期末の最終授業において、授業アンケートを主とした学習評価フォローアップ点検を実施し、その結果を授業担当教員へフィードバックした。 ○授業評価結果については、学年末にウェブにてクラス別結果という形で外部公開した。</p>
14	<p>○高専体育大会、ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、デザインコンテスト、高専祭、専門展など学生の自主参加活動をサポートするための、支援環境・体制維持及び強化に関して学生会議で年1回以上検討する。 ○東海地区高専体育大会、ロボコン東海北陸地区大会、プログラミングコンテスト、デザインコンペティションの参加を継続する。</p>	<p>○高専祭、専門展の自主参加活動をサポートするための支援環境・体制の整備について9～10月の学生会議で数回にわたり検討し、11～12月の学生会議では次年度への引き継ぎ項目について検討した。 ○東海地区体育大会、ロボコン地区大会、プロコン、デザインコンペティションの出場を継続し、多くの種目で全国大会出場を果たした。(デザコン2017を主催しじゅうろくプラザで実施した。)</p>
15	<p>・社会奉仕体験活動や自然体験活動等の参加・取組計画 ○学生会によるボランティア清掃活動(年2回以上)など地域社会への奉仕体験活動を推進する。</p>	<p>○平成28年度では、ボランティア活動(年2回)のうち前期は4/27に102名、後期は10/21に76名が参加して実施した(前期は降雨のため途中で中止)。学生会評議会終了後に行う、グリーンアップ活動(岐阜高専周辺の清掃活動)は毎月の評議会後に実施しており、雨天のための中止はあったが5/26、10/19、11/18の3回実施した。</p>
1-1-4 優れた教員の確保に関する事項		
16	<p>・優れた教員の確保や教員のキャリアパス形成のための取組計画 ○公募制を継続し、多様な背景を持つ教員の割合が60%を下回らないようにする。 ○企業経験、長期海外経験など多様な経験を持つ教員の割合は65%を超えている現状を維持するため、引き続き教員選考に当たっては、これらの多様な経験を有している教員の採用を行う。 ○専門科目(理系の一般科目を含む)については、博士の学位を持つ者や技術士等の職業上の高度の資格を持つ者、一般科目については、修士以上の学位を持つ者や民間企業等における経験を通して高度な実務能力を持つ者など優れた教育能力を有する者の採用の促進を図り、専門科目担当の教員については全体として70%、理系以外の一般科目担当の教員については全体として80%をそれぞれ下回らないようにする。 ○教員の海外派遣、国際学会への参加を推奨する。そのためには資金源として、外部資金を獲得を推奨する。また、参加人数の集計資料を作成する。 ○学生へも国際会議への参加を推奨するため、若手基金の維持に努める。 ○豊橋技術科学大学、岐阜大学、名古屋工業大学など近隣の大学で複数の教員が研修・共同研究を行っている。教員のこのような取り組みを引き続き積極的に進めていく。</p>	<p>・優れた教員の確保や教員のキャリアパス形成のための取組計画 ○平成28年度末には、多様な経験を持つ教員の割合は、平成26～28年度の人事委員会選考された13名のうち6名が多様な経験を有しており、多様な経験を持つ教員の割合は、65%を超える。 ○平成28年度末において、専門科目(理系の一般科目を含む)担当教員のうち、博士の学位を有する者は、85.5%、一般科目担当教員については100%に達しており目標を充足している。 ○平成27年度に1名の教員が、英国グラスゴー大学で長期在外研究を実施した。 ○毎年25名前後の教員が、積極的に国際学会に参加した。 ○複数の教員が、豊橋技術科学大学、岐阜大学、名古屋工業大学など近隣の大学で研修・共同研究を充実に行なった。</p>
17	<p>・他機関との教員交流 ○「高専・両技科大間教員交流制度」を活用した人材育成を検討する。 ○三機関連携の枠組みで、豊橋技術科学大学が推進する「高専教員の英語による授業力強化」プログラムに教員を派遣し、大学とマレーシアで約1年間の研修に参加させ、人材の育成を図る。 ○グローバル高専の事業においても他機関の教員と協力する。</p>	<p>・他機関との教員交流 ○「高専・技科大間教員交流制度」により、平成27・28年度には1名の教員が、他高専(豊田高専)において勤務経験を積んだ。 ○グローバル高専専攻科の拠点校として、教員研修プログラムを実施。本校及び他高専の教員が受講するなど人材育成に取り組んだ。 ○平成26年度に三機関連携の枠組みで、豊橋技術科学大学が推進する高専教員の英語による授業力強化プログラムに教員1名を参加させ、豊橋技術科学大学、米国、マレーシアで1年間の研修に参加させ、人材の育成を図った。</p>

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
19	<p>・女性教員採用・登用についての具体的な取組計画(施設整備を含む)</p> <p>○教員公募の際には、積極的に女性を採用する旨を明記し、評価が同等の場合、女性の優先的な採用を推進するなど、女性教員の比率向上を図る。</p> <p>○教員採用に際し、女性応募者獲得のために近隣大学、合同説明会に参加するなどの方策を検討する。</p> <p>○女性教職員の就業環境改善のため、女性用の更衣室、休憩室等の整備を推進する。</p>	<p>・女性教員採用・登用についての具体的な取組計画(施設整備を含む)</p> <p>○女性教員の積極的な採用のため、平成28年度の教員公募に際しても、評価が同等の場合、女性の優先的な採用を推進した結果、女性教員1名を採用した。</p> <p>○女性教職員の就業改善のため、女性用の更衣室、休憩室を整備した。また、トイレを改修し温水洗浄機付便座を一部の洋式便座に設置した。</p> <p>○平成29年度当初には、女性教員が6名になり全教員に対する割合は7.7%である。各学科で少なくとも1名の女性教員を任用することを推進しており引き続き女性教員の採用に努力する。</p> <p>○平成26年度に男女共同参画推進室を立ち上げ、女性教員数の増加によって生じる長短の分析、及びその対応を本校独自で検討する計画であったが、すでに国や高専機構本部主導で現実的な施策が実践されており、その方針に従って押し進めることとした。</p>
20	<p>・近隣大学等が実施するFDセミナー、地元教育委員会等が実施する高等学校の教員を対象とする研修、企業や技術士会等を利用した教員を対象とする能力向上に資する研修への参加・実施計画</p> <p>・教員FDの取組計画</p> <p>FD活動推進会議や教育AP推進室が連携して以下の内容に取り組む。</p> <p>○他高専が主催するIT教育コンテンツに係る研修会、Webシラバスに係る研修会等に教員を派遣する。</p> <p>○年度内にFD講演会(2回)とこれと関連付けた授業参観を実施する。</p> <p>○教育AP推進室が中心となって新たに導入したICT機器の講習会を実施し、利用の促進を図るとともに、学修支援コンテンツの充実を推奨する。</p> <p>○アクティブラーニング推進WG長が中心となり、教員会議後にミニFD研修会を実施する。</p>	<p>・近隣大学等が実施するFDセミナー、地元教育委員会等が実施する高等学校の教員を対象とする研修、企業や技術士会等を利用した教員を対象とする能力向上に資する研修への参加・実施計画</p> <p>・教員FDの取組計画</p> <p>FD活動推進会議や教育AP推進室が連携して以下の内容に取り組んだ。</p> <p>○FD関連の講演会を外部講師を含め、毎年2回開催した。</p> <p>○FD講演会と関連付けた授業参観を毎年2回実施した。</p> <p>○アクティブラーニング推進WG長が中心となり、教員会議後にミニFD研修会を実施した。</p> <p>○インタラクショナルデザイン研修(京都)、第3ブロックALTトレーナー教員研修会(京都)等に教員を派遣した。</p> <p>○第3ブロックのAL研究会を本校で開催した。</p>
21	<p>○毎年、教育活動や生活指導に優れた教員を、全国高専教員顕彰に積極的に推薦する。</p> <p>○教育・研究及び学校運営、地域社会とのかかわりで特に顕著な功績を挙げた教職員を『特別功労者』として表彰する。</p> <p>○教員評価制度の制定と実施を行い、教員評価の透明性を高める。</p>	<p>○毎年教育活動や生活指導に優れた教員を全国高専教員顕彰に推薦し、平成26～28年度に理事長賞と部門賞を受賞し、全国高専フォーラムにおいて、発表を行った。</p> <p>○教員評価を実施した。</p>
<p>1-1-5 教育の質向上及び改善のためのシステム</p>		
23	<p>・モデルコアカリキュラム(試案)を踏まえたカリキュラム、授業内容見直しへの計画</p> <p>・アクティブラーニングによる学生の主体的な学びへ向けた計画</p> <p>・ルーブリック等による学生の到達目標を設定した授業内容見直しと授業実践の計画</p> <p>○Webシラバスの導入に向けて、平成28年度開講科目について全教員がシラバスデータを試行的に入力する。</p> <p>○モデルコアカリキュラムの分野別横断能力(いわゆる人間力)の向上を図るため教育AP推進室が中心となり、本校独自の『実践技術者単位制度』を拡充する。</p> <p>○アクティブラーニングによる学生の主体的な学修を推進させるため、AP推進経費によりICT教育施設や学習コンテンツの利用率が50%以上とする。</p>	<p>○分野別横断能力(いわゆる人間力)の向上を目的として教育AP推進室が中心となり、本校独自の『実践技術者単位制度』の拡充を図りつつあり、モデルコアカリキュラムを踏まえた授業内容の見直しにもつなげる予定である。また、平成28年度では、開講科目について全教員が試行的にWEBシラバスを作成した。</p> <p>○ICT教育施設の利用に関する指標として、LMSの利用率は学生が80%、教員が47%であった。(モデルコアカリキュラムに基づく、ウェブシラバスを作成した。)</p>
24	<p>・ICT活用教材や教育方法の開発、利活用計画</p> <p>○モデルコアカリキュラムの導入とICT活用を推進するため、情報処理センターのみならず、教育AP予算による校内ICT環境を順次改善する。また、学内全体でその活用が可能となるよう、環境改善や外部資金獲得などに努める。</p> <p>○webシラバス導入や教育APIによる実践技術者単位などの見える化を推進する。</p> <p>○教育改善が主である教育APを含めて、他高専と情報統合システムの整備に向けて連携を行い、教育方向の改善などの推進を実施する。</p>	<p>・ICT活用教材や教育方法の開発、利活用計画</p> <p>○ALのICT活用機器については、AP予算により、電子黒板機能付きプロジェクト、6号館の端末のリプレイス、また、学内予算により、情報処理センターの端末、6号館の机・椅子のリプレイスが完了した。</p> <p>○他高専と連携した情報統合システムの整備、教育APについては、各種講習会に主要なメンバーを派遣して、教員に周知し、教育FDを実践した。</p>
25	<p>・JABEE認定、機関別認証評価への取組計画</p> <p>○新専攻教育課程を含む新基準対応のJABEEプログラムを公開し、学生に周知する。</p> <p>○新教育課程のJABEE認定に向けて、検討を継続する。</p> <p>○JABEE達成度評価科目について、他機関からの専攻科入学生への対応も考慮した見直しを検討する。</p>	<p>○新専攻教育課程を含む新基準対応のJABEEプログラムを公開し、HP掲載、資料配布、教室掲示等により学生に周知した。</p> <p>○変更届を提出した結果、変更時審査は不要と判定された。次回2020年の継続審査に向けて、検討を開始した。</p> <p>○ドイツ語、法学等専攻でJABEE必修となっている科目の取扱いについて検討した結果、多様な学生に対応可能となるよう達成度評価科目からドイツ語を削除する変更を決定した。</p>
26	<p>○JASSOの支援を受けて、交流協定を締結した海外6大学(バンドン工科大学、マレーシア工科大学、ハンノーバー大学、アイオワ大学、トリノ工科大学タシケント校、タシケント工科大学)からの短期留学生(最大14名)(6～8月)を受け入れる。短期留学生は希望する研究室に配属され研究室の学生との交流を図る。</p> <p>○同じくJASSOの支援を受けて13名の専攻科生を、8～9月に3週間、協定締結の海外大学および在英国企業TYK Ltd.に派遣する。</p>	<p>平成28年度では</p> <p>○JASSOの支援を受けて、交流協定を締結した海外6大学(バンドン工科大学、マレーシア工科大学、ハンノーバー大学、アイオワ大学、トリノ工科大学、タシケント工科大学)からの短期留学生(18名)(6～8月)を受け入れた。短期留学生は希望する研究室に配属され研究室の学生との交流を図った。</p> <p>○同じくJASSOの支援を受けて15名の専攻科生を、8～9月に3週間、協定締結の海外大学および在英国企業TYK Ltd.に派遣した。</p>
27	<p>・特色ある優れた教育実践や取組計画</p> <p>○エンジニアリングデザイン(ED)教育に関する取組計画において、企業技術者等活用プログラムを継続し、シニアOBとの連携を継続・発展させる。</p> <p>○アクティブラーニング(AL)におけるシニアOBとの連携を構築し、教育APによるコンテンツの可視化を推進する。</p> <p>○各科・組織等の優れた取組み(OBOG連携、キャリアパス教育など)を、全体で共有できるように、各年度の各科ごとの取組み状況を見える化する仕組みを構築する。</p>	<p>・特色ある優れた教育実践や取組計画</p> <p>○エンジニアリングデザイン(ED)教育では、弁理士や企業技術者等を活用したプログラムを継続した。</p> <p>○アクティブラーニング(AL)では、シニアOBとコンテンツの共同開発について作業を進め、教育AP報告会において情報発信した。</p> <p>○キャリアパス教育については、企業等で活躍する卒業生などを招聘し、各種講演会や座談会を実施して、高専の早期専門教育を意識した学生のキャリア形成や可能性を涵養した(講演会:40回、見学会:13回、座談会:15回)。</p>
28	<p>・自己点検評価への取組計画</p> <p>○スパイラルアップ点検および改善を実施する。</p> <p>○年度計画の実績実施状況を自己点検・評価し、次年度の年度計画に反映する。</p> <p>○学習評価フォローアップ点検を実施し、評価結果を学内周知する。</p>	<p>○スパイラルアップ会議にてスパイラルアップ点検及び改善を実施した。</p> <p>○次年度初回の点検評価・フォローアップ委員会(4月中旬開催予定)にて、前年度年度計画の実績実施状況を自己点検・評価を実施し次年度第1回スパイラルアップ会議(4月中旬開催予定)にて報告する予定である。その後開催される次年度第1回将来計画委員会(5月中旬開催予定)にて、次々年度の年度計画に反映させる予定である。</p> <p>○前後期末の最終授業において、学習評価フォローアップ点検を実施した。評価結果は、学年末に学内で周知した。</p>

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
29	<p>・インターンシップの実施計画 【本科】インターンシップに関する情報を積極的に入手、公開し、4学年の学級担任が中心となって、参加率の維持を図る。 【専攻科】 ○本科専門学科ごとの企業・官公庁などとの連携を維持・充実し、専攻科生全員がインターンシップに参加できる体制を継続する。 ○岐阜県インターンシップ推進協議会などと連携したキャリア教育・支援制度を維持して、事前講習や報告会などのフォローアップを実施する。 ○国内の企業・官公庁・大学や海外の交流協定大学等と連携したインターンシップや共同教育を実施する。 ○専攻科は国際交流室と連携し海外インターンシップ・短期留学派遣を含めて、全員が特別実習を3週間実施する体制を継続する。 ○海外派遣については、海外滞在経験をもつシニアOBによる事前講習、危機管理サービス(OSSMA加入)、交流協定を締結している海外大学からの短期留学受入による事前交流(本校の学生寮や研究室配属)などを有効に活用する。</p>	<p>【本科】 ○例年通り、4学年の学級担任が推奨および情報提供を行い、4年生148名が、インターンシップに参加し、報告会も行われた。参加率は68.2%であった。 【専攻科】 ○企業・官公庁・海外交流協定大学などとの連携を維持・充実し、専攻科1年全員(100%)が国内外のインターンシップ(特別実習3週間)を実施した。 ○岐阜県インターンシップ推進協議会などと連携して、事前講習や報告会などのフォローアップを実施した。 ○短期留学派遣については、海外滞在の経験をもつシニアOBによる事前講習、交流協定大学からの短期留学受入による事前交流(本校の学生寮や研究室配属)などが有効に活用された。 ○短期留学派遣において、危機管理サービス(OSSMA)については、本校が独自で加入した。</p>
30	<p>・企業人材等を活用した共同教育の取組計画 ○シニアOBなどの企業技術者等から、本校非常勤講師、地域連携協会理事、中核人材育成塾講師、本校産学官連携アドバイザーなどとして人材を活用し、情報発信する。 ○建設技術士有志会のシニアOBによる学生への導入教育支援やキャリア教育を展開する。</p>	<p>○シニアOBなどの企業技術者等から、本校非常勤講師、地域連携協会や参与会の理事、中核人材育成塾講師、本校産学官連携アドバイザーなどとして人材を活用した。 ○建設技術士有志会のシニアOBによる学生の導入教育支援やキャリア教育を展開している。 ○女性技術者によるキャリア教育を実施した。</p>
31	<p>・共同教育の実施計画 ○豊橋・長岡技術科学大学の研究プロジェクトに応募し、卒業研究、特別研究における共同教育を実施する。 ○三機関連携の各種事業には、教員に周知し、必要に応じて本校教員を派遣する。</p>	<p>・共同教育の実施計画 ○豊橋・長岡技術科学大学の共同研究プロジェクトに応募し採択され、卒業研究、特別研究における共同教育を進めている。 ○三機関連携の各種事業には、教員に周知し、必要に応じて本校教員を派遣している。 ○JSTS、ISTS(インドネシア)に学生を1名派遣した。</p>
32	<p>・ICT活用教育に必要な構内情報基盤の整備計画 ○ICT活用教育に必要な構内情報基盤の整備計画として、高専機構による平成30年度の基幹ネットワーク統一に向けた準備・調査等に適切に対処する。 ○ICT機器活用のため、Wifi 利用促進を検討する。 ○情報処理センターを中心として、学校全体で広く活用できるように、ICT活用やMCCなどの外部資金獲得に努める。 ○ICTを活用した教材や教育方法の開発の推進については、高専機構が導入したLMS(Blackboard)の運用整備と実践を行い、MCCの分類に従った教材集約や教育方法の情報共有を行う。 ○APの取組では、4年生教室と5年生教室に電子黒板を導入し、MCCのコンテンツのうちシニアOBの意見が反映された44コンテンツの教材作成および教育方法の開発を継続する。</p>	<p>・ICT活用教育に必要な構内情報基盤の整備計画 ○高専機構による平成30年度の基幹ネットワーク統一に向け、情報担当者検討会に出席し、応礼業者との現地ヒアリングを実施した。 ○Wifi 利用促進のため、試験的に電気情報工学科第3～5学年の学生を対象にWifi 利用を試行し、平成29年度は全学生を対象に試行することにした。 ○ICT活用やMCCなどの外部資金獲得に努めた。 ○Blackboard自体の存続が危ういため、動向を見極めている段階である。 ○APの取組では、4年生教室と5年生教室に電子黒板を導入し、MCCのコンテンツのうちシニアOBの意見が反映された44コンテンツの教材作成および教育方法の開発を継続した。</p>
<p>1-1-6 学生支援・生活支援等に関する事項</p>		
33	<p>・メンタルヘルスについての取組計画 ○1年生対象に学外講師によるメンタルヘルス講演会を実施する。 ○教職員を対象としたメンタルヘルス講習会を開催する。 ○生活指導寮生による1年生への指導体制・内容の見直しを図る。</p>	<p>○1年生を対象とした学外講師によるメンタルヘルス講演会を毎年実施した。 ○教職員を対象としたメンタルヘルス講習会を毎年開催した。 ○長年に渡り行われてきた生活指導寮生による1年生への指導は、いくつかの問題点が指摘され全て撤廃した。次年度からの新入寮生教育、上級生との関わりについて検討した。 ○ウィークデーにはカウンセラーが在校しているように配置した。</p>
34	<p>・寄宿舎等の学生支援施設の整備計画 ○学生寮運営の方針や寮生の生活指導 ○充実した教育寮を目指す。実質収容定員296名に対する年度当初充足率を85%以上とする。 ○施設運用規定の範囲で、入寮希望の新入生・編入生全員の入寮を許可する。 ○定員の関係等で継続入寮に制限を課す場合、高学年は下級生の模範となる寮生を優先して入寮させる。 ○希望者がいる場合、留学生のホームステイを年1回程度実施する。 ○寮周辺清掃等のボランティア活動を年1回程度実施する。 ○年1回開催の寮生保護者懇談会、給食懇談会の維持充実を図る。寮生会活動を活用し寮生の建設的な意見を寮運営に反映させる。 ○寮父寮母制度の維持充実を目指す。 ○各寮談話室及びA寮多目的室の有効利用促進を維持する。 ○寄宿舎の計画的な整備に向け、寄宿舎施設・設備に関する学生の満足度・ニーズ調査を行い、調査結果に基づき計画的な整備を推進する。</p>	<p>・寄宿舎等の学生支援施設の整備計画 ○学生寮運営の方針や寮生の生活指導を大幅に変更し、全寮生が守るべき規則のみを残し、他は廃止した。 ○26年度当初の充足率は89.5%であった。 ○入寮を希望した新入生・編入生全員の入寮を許可した。 ○希望した留学生を対象としてホームステイを実施した。 ○ボランティア(寮敷地近辺の清掃)活動を実施した。 ○寮生保護者懇談会と給食懇談会を毎年実施した。寮生からの意見は意見箱に加え寮務主事に対するメール形式で日常的に寄せられている。 ○寮父2名、寮母1名が勤務している。 ○26年度からA寮多目的室で毎週水曜に3年生が1年生に学習指導を実施する企画を開始して定着している。 ○全寮総会において、寮の施設設備に関する学生の満足度・ニーズ調査を実施し、調査結果から、要望の多かった温水洗浄器付便座を設置した。また、寮棟周辺の空き地部分に防草シートを順次敷詰した。これにより洗濯物干場確保、害虫の減少が期待される。また、H29年度には男子浴室の内装改修工事が行われることが決定した。</p>
35	<p>・就学支援・生活支援の取組計画 ○日本学生支援機構奨学生募集説明会、岐阜県選奨生募集説明会を実施する。 ○天野工業技術研究所奨学金など産業界等の支援による奨学金募集についても学級担任等を通じて実施し、学校推薦者に関しては学生会議で審議する。</p>	<p>○毎年、4月に日本学生支援機構奨学生募集説明会、岐阜県選奨生募集説明会、11月に日本学生支援機構奨学金返還説明会を実施した。 ○毎年、学生会議で審議し、天野工業技術研究所奨学金に1名を推薦、採用された。日本教育公務員弘済会奨学給付奨学生に本校から1名を推薦、採用された。</p>
36	<p>・キャリア形成支援についての取組計画(女子学生に対する取組を含む) ・高い就職率を確保するための取組計画 ○キャリア形成支援に対応するため進路相談カウンセラーとしてOB教員を学生相談室に週2日配置する。 ○第4学年対象に就職講演会を実施する。 ○第3学年・第4学年・専攻科生の希望者を対象に専攻科入学・大学編入学及び大学院入学希望者ガイダンスを実施する。 ○ホームページ(学内専用)で求人情報を公開する。</p>	<p>○進路相談カウンセラーとしてOB教員を学生相談室に週2日配置した。 ○本科4年生を対象として「就活スタートアップ講座」と題し外部講師による就職活動の作法と対策関連の講演会を実施した。また第5学年4月以降の就活を控えた気づきの場として、京都・名古屋で開催の業界研究セミナー・就職セミナー・合同会社説明会への積極的参加を促している。 ○専攻科1年生を対象とする7大学院による進学説明会を実施した。なお福井大学の本科4年生も対象としている。本科3・4年生及び専攻科1年生を対象とする専攻科進学・大学編入学及び大学院進学ガイダンスを実施した。 ○本校の学内専用ホームページに学内公開情報として求人情報をアップロードしている。また学外向けホームページの「就職・進学」のページには就職進学状況の実績、企業求人担当者向けに求人依頼案内を併せて掲示している。</p>

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
1-1-7 教育環境の整備・活用に関する事項		
37	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の有効活用についての取組計画(利用状況調査、スペースの再配置等) ・アクティブラーニング等の学習環境充実を図る施設整備計画 ・環境配慮への取組計画 ○施設・設備に関する実態調査を実施し、老朽化した施設・設備の実態を把握し、整備計画の見直しを実施する。 ○教育・研究施設の有効活用調査を実施する。 ○校舎改修(建築学系)の概算要求資料に、アクティブラーニングの施設整備を含めて計画し、概算要求事業として要求する。 ○改修工事で照明設備を改修する際は、LED照明を積極的に採用し、省エネ化の取組を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○施設・設備に関する実態調査を実施し、「国立高専機構施設整備5か年計画」に合わせた(第4次)5か年計画表を作成し、整備計画の見直しを実施した。 ○施設の有効活用調査を実施し、(H30年度)概算要求事業に有効活用内容(要求施設の稼働率向上の工夫)を反映した。 ○校舎改修(建築学系)の概算要求資料に、デジタル教育環境の進化として、「デジタル&アクティブラーニング演習室」等の施設整備を計画し、概算要求事業として要求した。 ○1号館階段・2号館廊下等照明設備改修について、LED照明を採用し、省エネ化の取組を推進した。
38	<ul style="list-style-type: none"> ・施設整備計画の取組計画(キャンパスマスタープラン・インフラ長寿命化計画の策定等) ○身障者対策として、エレベーターの設置を要求する。 ○非構造部材の耐震対策について、屋内運動場の天井材、照明器具等の落下防止対策を推進する。 ○キャンパスマスタープランの2013の見直しを実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身障者対策としてエレベーターの設置を平成26年度に要求し、平成28年1月に1号館エレベーターが完成した。 ○第一体育館全面改修、第二体育館・武道場・安藤記念館の非構造部材耐震補強及び屋内運動場等耐震改修(非構造)の天井材・照明器具等落下防止対策を計画的に実施し、平成28年3月に完成した。 ○「キャンパスマスタープラン2013」の点検・見直し作業を行い、平成28年8月に点検・見直しを策定した。また、平成28年9月からは「岐阜高専キャンパスマスタープラン2017」の策定作業に着手し、平成29年3月の財務・施設委員会にて、原案資料等が了承された。平成29年5月運用に向けて、予定どおり進めている。
39	<ul style="list-style-type: none"> ・PCB廃棄物の保管や処分についての取組計画 ○PCB廃棄物については、ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法等に基づき、適切な保管を継続して実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○PCB廃棄物については、ポリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法等に基づき、適切な保管に努めており、機構本部に対して廃棄処理費用を引き続き、要求している。
40	<ul style="list-style-type: none"> ・危機管理への対応 ○新入生、新規採用職員に対し、「実験実習安全必携」を配布する。 ○学生・教職員を対象に熱中症対策講習会を開催する。 ○学生・教職員を対象に救急法(AED)講習会を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○毎年、新入学生及び新採用教職員(非常勤講師を含む)へ「実験実習安全必携」を配付 ○毎年、教職員、学生を対象に熱中症講習会を開催した。 ○毎年、救急法(AED)講習会を開催した。 ○平成26年度には、教職員を対象に健康(飲酒)に関する講習会を開催した。
41	<ul style="list-style-type: none"> ・男女共同参画に関する意識啓発等ワークライフ・バランスを推進するための取組計画 ○女子学生のキャリアアップと入学率向上のために、オープンキャンパスや高専祭、公開講座など本校PRの機会を通して、本校女子学生が中心的役割を担える体制づくりを推進する。 ○女性職員や女子学生を対象としたキャリア支援のための研修会や研究会に、積極的に参加できる体制づくりを推進する。 ○女性教員比率向上のためポジティブアクションを継続して実施する。 ○女性教職員の育児・介護等やその復帰に際して、機構の各種支援事業を周知し、活用を促進する。 ○各高専の取り組みを把握し、本校での実践の可否を検討する。 ○教職員及び学生に対する啓発活動として、各種プログラムを活用した男女共同参画に関する講演会を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○女子学生のキャリアアップのため、富山で開催された『高専女子フォーラムin東海北陸』に女子学生5名が参加し、4件の発表を行った。 ○女子学生の入学率向上のための施策検討を目的に、最近の本校の入試動向を分析し、東海工学教育協会高専部会のシンポジウムで報告した。 ○女性教員の積極的な採用のため、評価が同等の場合、女性の優先的な採用を推進した。 ○機構等からの各種支援事業について、メール等で適宜周知を行った。 ○第3ブロック担当者会議で先進校の実践事例など、各校の取り組み状況を把握した。ただ、本校では、女性教員数の比率向上が最優先課題である。 ○意識啓発講演会について、全教職員にメールで周知したが、時間的な制約もあり、主に推進室委員が参加した。また、女性研究者向け外部資金獲得支援研修に参加した。
1-2 研究や社会連携に関する事項		
42	<ul style="list-style-type: none"> ・外部資金獲得への取組計画 ○外部資金獲得として、新技術説明会などに出展して研究シーズを広報するとともに、科学研究費助成事業や各種研究助成への申請と採択目標を掲げ、研究業績に関連する論文等の発信、啓蒙活動等を継続する。 ○各年度の外部資金獲得状況を学内で周知し共有化することにより、全教職員に周知している外部資金データベースの効率的活用を維持する。 ○NEDOによる大型予算プロジェクトが継続できるように学内体制を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部資金獲得への取組計画 ○科学研究費助成事業や各種研究助成への申請と採択目標を掲げた。さらに、他高専、大学などと共同する社会連携テーマについても具体的に提案し活動した。 ○外部資金獲得状況を学内で周知し共有化して、外部資金データベースの効率的活用を進めた。 ○NEDOによる大型予算プロジェクトについて、機構本部CDと連絡を密にして実施し次年度の提案を行った。また、JSTのマッチングプランナーなどを交えた本校の研究シーズと企業ニーズについて定期的に打合せを行った。
43	<ul style="list-style-type: none"> ・産学連携についての取組計画 ○外部資金獲得状況を各種連携団体(地域連携協会など)との総会等で見える化する。 ○地域連携協会の共同研究プロジェクトや各種事業を継続し、会員数の維持に努める。 ○地方公共団体などとの(産)官学連携による取組みのデータベース化を行い、社会ニーズと研究シーズを見える化する。 ○コーディネーター(本校および機構本部)を通じて産官学連携を推進する。 ・地域共同テクノセンター等の活用計画 ○共同研究利用室やセンター機器の活用に関しては、テクノセンター等の広報活動を通じて、学内および学外へ情報提供を継続する。 ○補正予算で購入した設備等(各学科所有を含む)については、できるだけ第3ブロックの研究協働共有化推進に登録し、ラボツアーなどで公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・産学連携についての取組計画 ○外部資金獲得状況を地域連携協会などとの総会等で公表した。 ○地域連携協会の共同研究プロジェクトや各種事業を実施した。会員数200以上を維持し、新規会員を獲得した。 ○地方公共団体などとの(産)官学連携による社会のシーズについては、コーディネータのネットワーク情報や本校教員が務めている各種審議会委員等を通じた社会貢献活動リストを整理した。 ・テクノセンター等の活用計画 ○テクノセンターの共同研究利用室やセンター機器、学科所有の設備活用に関して、利用リストを整理し、学内および学外利用者への情報提供を継続し共同研究への呼び水とした。 ○補正予算で購入した特殊設備等(各学科所有を含む)については、地域連携協会のテクノシンポジウム、外部からの訪問者などのラボツアーにおいて積極的に公開した。
44	<ul style="list-style-type: none"> ・産学連携についての取組計画 ○外部資金獲得状況を各種連携団体(地域連携協会など)との総会等で見える化する。 ○地域連携協会の共同研究プロジェクトや各種事業を継続し、会員数の維持に努める。 ○地方公共団体などとの(産)官学連携による取組みのデータベース化を行い、社会ニーズと研究シーズを見える化する。 ○コーディネーター(本校および機構本部)を通じて産官学連携を推進する。 ・地域共同テクノセンター等の活用計画 ○共同研究利用室やセンター機器の活用に関しては、テクノセンター等の広報活動を通じて、学内および学外へ情報提供を継続する。 ○補正予算で購入した設備等(各学科所有を含む)については、できるだけ第3ブロックの研究協働共有化推進に登録し、ラボツアーなどで公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・産学連携についての取組計画 ○外部資金獲得状況を地域連携協会などとの総会等で公表した。 ○地域連携協会の共同研究プロジェクトや各種事業を実施した。会員数201以上を維持し、新規会員を獲得した。 ○地方公共団体などとの(産)官学連携による社会のシーズについては、コーディネータのネットワーク情報や本校教員が務めている各種審議会委員等を通じた社会貢献活動リストを整理した。 ・テクノセンター等の活用計画 ○テクノセンターの共同研究利用室やセンター機器、学科所有の設備活用に関して、利用リストを整理し、学内および

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
45	<p>・産学連携についての取組計画</p> <p>○研究シーズ集(和文・英文)、地域連携協会会誌(200会員以上)などをウェブ上で一部閲覧させるとともに、産官学連携コーディネーターやアドバイザーなどと情報発信する。</p> <p>○社会ニーズ、研究シーズ、外部組織、および官公庁の施策などに精通した産官学連携コーディネーターやアドバイザーなどと、地域産業界との中長期的な信頼関係の構築を目指す。</p>	<p>・産学連携についての取組計画</p> <p>○産官学連携コーディネータとともに、岐阜県などの地方自治体や企業、研究機関、東海北陸地区高専CDの連携など、情報共有を密にした。</p> <p>○岐阜県産経センター、ぎふ技術革新センターなどの地域産業界との長期的な信頼関係を基礎として、新たに農林業・水産産業を視野に入れた取組みを進めた。</p> <p>○研究シーズをもとに高専間の研究連携ネットワーク(全国、第3ブロックなど)に参画した。</p>
46	<p>・小中学校と連携した理科教育支援への取組計画</p> <p>○科学技術リテラシー推進室とテクノセンター技術教育部門等が連携して、教職員のみならず、学生(本科および専攻科)も主体的に活動できる体制を維持する。</p> <p>○アウトリーチ活動による社会貢献が過剰にならないように、自己評価書(教員職務活動)によるエフォートなどを通じて教育、研究などとのバランスを見える化する。</p> <p>○小中学生を対象とした公開講座について、7割以上の満足度を維持するようにコンテンツの改善に努める。</p> <p>・地域技術者育成への貢献(社会人の学び直し等)</p> <p>○シニアOBによる「中核人材育成塾(基礎編・応用編)」を継続し、7割以上の満足度を維持するようにコンテンツの改善に努める。</p>	<p>・小中学校と連携した理科教育支援への取組計画</p> <p>○科学技術リテラシー教育推進室によるリテラシー教育実習(本科、専攻科)、ぎふサイエンスフェスティバルなどの出展、各種団体(小学校、行政など)からの講師派遣依頼に対応した。</p> <p>○小中学生を対象とした公開講座について、7割以上の満足度を維持した。</p> <p>・地域技術者育成への貢献(社会人の学び直し等)</p> <p>○地域が抱える課題を解決する提案事業(ネットワーク大学コンソーシアム岐阜)に2件応募し報告会を行った。</p> <p>○シニアOBによる「中核人材育成塾(基礎コース・アドバンスコース)」を継続し(受講者:延べ2600名)、80%以上の満足度を得た。</p> <p>・卒業生ネットワークの構築並びに活用計画</p> <p>○同窓会若船会の設立50周年記念実行委員会が組織されキックオフ事業が開始された。さらに、記念式典、一般向けを対象とした継続的な講演会シリーズ(講師:多方面で活躍する卒業生)が企画された。</p>
1-3 国際交流等に関する事項		
47	<p>・国際交流協定の締結</p> <p>○第2期までに締結した海外4大学(バンドン工科大学、マレーシア工科大学、ハノーバー大学、アイオワ大学)との継続的な国際交流を進める。</p> <p>○JASSOの支援を受けて、短期派遣と短期受入を同時に実施し、海外4大学からの短期留学生を受け入れ、この機会を利用して学生間の相互交流を推進するとともに、事業実施における課題を整理する。</p> <p>○新たな学術交流協定先の可能性を検討し、ネパールのトリバン大学、トリノ工科大学(ウズベキスタン校)及び仏国のリールA工科大学との交流を検討する。</p> <p>○第3ブロックの各高専で実施されている海外派遣・受け入れについて、ブロック内の情報共有システムの構築を模索する。</p>	<p>・国際交流協定の締結</p> <p>○第2期までに締結した海外4大学(バンドン工科大学、マレーシア工科大学、ハノーバー大学、アイオワ大学)との継続的な国際交流を進めた。JASSOの支援を受けて、毎年、専攻科生の短期派遣と短期受入を同時に実施し、海外4大学からの短期留学生を受け入れた。短期研修・研究型の双方向交流プログラムで2～3週間滞在するので、この機会を利用して学生間相互の交流を推進するとともに、事業実施における課題を整理している。</p> <p>○新たな学術交流協定先の可能性を検討し、平成26年度は、トリノ工科大学(ウズベキスタン校)と、平成27年度はタシケント工科大学、リール工業短期大学、タシケント自動車・道路建設大学と、平成27年度はベトナムハノイ建設大学・ベトナム中部土木大学と新たに国際交流協定を締結した。(平成29年度中国・江蘇城郷建設職業学院と締結)</p> <p>○二国間交流事業国際セミナー(環境負荷の低減と災害に対する強靱性を備えた都市インフラ整備)をJSPSの支援により、本校とインドネシア・バンドン工科大学が中心となって3月に開催。</p>
48	<p>・学生の海外派遣計画</p> <p>○本校が国際交流を締結している海外の大学及び法人企業(英国:TYK Limited)に夏季休業期間を利用して、専攻科1年生を海外インターンシップおよび短期留学派遣する。その財政的支援は、JASSOおよび外部資金を活用する。事前研修では、長期海外滞在経験のシニアOBなどの交流会を実施し、海外進出日本企業の工場見学などを可能な範囲でプログラムに組み込む。</p>	<p>○国際交流協定を締結している海外大学および英国企業TYK Ltdに夏季休業期間を利用して、専攻科1年生を海外インターンシップ及び短期留学として学生を派遣した。</p> <p>○長期海外滞在経験のシニアOBに講演して頂き、派遣学生に対して事前研修を行った。</p>
49	<p>・留学生の受入体制の強化計画(留学生用の居室整備またはこれに類するものを含む)</p> <p>○国費及びマレーシア政府派遣留学生は留学生対象に運用可能な居室の範囲内で可能な限り受け入れる。私費留学生は国費及びマレーシア政府派遣留学生の受入に支障を生じない範囲内で受け入れる。短期留学生は長期留学生の居住に支障を生じない範囲内で受け入れる。</p> <p>○留学生の快適な居住環境の確保のために必要な寄宿舎整備計画を検討する。</p>	<p>○留学生の快適な居住環境の確保のために必要な寄宿舎整備計画を検討し、年度途中から学内の宿泊施設を広く利用できるよう調整を行った。</p> <p>○柔軟な受け入れ態勢を整えるため、各寮棟内へのシャワールーム設置が望まれる。</p> <p>○毎年、学業において、海外協定大学から12～18名の短期留学生を受け入れた。短期留学生同士がなるべく近い部屋で生活できるように、日本人学生の居室配置を工夫した。</p>
50	<p>・外国人留学生に対する研修の実施計画</p> <p>○国際交流室と寮務会議、該当学科の連携下に、年1-2回見学会・研修会・旅行等を実施する。</p> <p>○研修旅行には博物館や歴史的遺産を訪問するとともに、日本の習慣や文化等を体験させるために、宿泊を伴う旅行を実施する。</p>	<p>○国際交流室と該当学科の連携下に宿泊を伴う研修旅行の実施計画を立案した。</p> <p>平成26年度＝姫路市見学、平成27年度＝金沢市(茶の湯名所めぐり) 平成28年度＝大阪での日本食文化体験及び大阪散策</p>
1-4 管理運営に関する事項		
52	<p>・教職員の服務監督・健康管理・コンプライアンス意識の向上に関する取組計画</p> <p>○機構本部が作成した、コンプライアンスマニュアル及びコンプライアンスに関するセルフチェックリストを活用して、教職員のコンプライアンスの向上を行う。</p>	<p>○機構本部が作成したコンプライアンスマニュアルに基づき、コンプライアンスに関するセルフチェックを実施した。</p>
53	<p>○高専機構が実施する階層別研修に教職員を参加させ、コンプライアンス向上に努める。</p>	<p>○教職員等階層別研修に毎年10名以上の教職員が参加した。</p>
54	<p>・校内の監査体制、監事監査・内部監査及び高専相互会計内部監査の指摘・改善等への対応</p> <p>○校内・外における監査において指摘のあった事項や改善策等に対して更なる取組強化を図る。</p> <p>○監査が形骸化にならないような実効性のある監査(リスクアプローチ監査、モニタリングの促進)の実施に努める。</p>	<p>○毎年、高専間相互会計内部監査を実施し、指摘のあった事項や改善事項に対してさらなる取組強化を図り、措置報告を行った。</p> <p>○毎年、公的研究費に関する内部監査を実施した。</p> <p>○平成28年度から新たに、運営費交付金対象事業に関する内部監査を「公的研究費の内部監査」に準じて実施した。</p>

岐阜工業高等専門学校 年度計画及び自己点検評価

項目番号	26～28年度計画	26～28年度計画に対応した実施報告
55	<p>・公的研究費のガイドラインに対する取組措置状況について ○(1) 研究費使用に関する意識改革(2) 納品検収体制の充実(3) 監査体制の強化(4) 会計事務組織の充実(5) 取引業者への対応の上記5項目について、会計検査院等からの指摘事項を踏まえ、教職員への周知徹底を図るとともに、それぞれの項目において具体的に取組むこととする。</p> <p>○「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)(平成26年2月18日改正)に基づき、高専機構本部が作成する指針を元とした体系の明確化と適正な運営・管理ができるよう環境整備を図る。</p>	<p>①「研究における不正行為」「研究費の不正使用」のガイドラインについて「主管会議」等で概要説明。 ②「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドラインの改正について」説明。「公的研究費使用マニュアル(岐阜高専版)」の配布及び「公的研究費等の取扱いに関する規則」外について説明及び公的研究費不正使用の注意喚起。 (2)「名入り検収印」の押印及び検収シールの貼付するとともに「納品検収窓口」設置した。 (3)「通常監査」「特別監査」の抽出件数を増量し、売掛帳(写)と支払伝票との突合確認した。その他に、業者に対する不正使用・防止等のヒアリング実施した。 (4)機構本部による「職員研修会」を受講し、さらに会計系事務職員ブロック研修会を実施した。 (5)年度末の債権債務の状況の突合を実施するとともに、取引業者へ「誓約書」提出を求め、不正防止の理解促進を図った。 (6)高専機構本部が作成した指針を元とした体系の明確化と適正な運営・管理ができるよう環境を整備。 教職員を対象に改正された「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」を周知徹底した。 教職員を対象とした公的研究費不正使用防止コンプライアンス教育を実施した。</p>
56	<p>・職員に対する研修の実施・参加計画(国、地方自治体、国立大学、企業等が実施する研修等の活用を含む) ○事務職員・技術職員の能力向上を図るため、人事院、岐阜大学等が主催する研修会に参加させる。</p>	<p>○事務職員・技術職員は、高専機構、人事院及び国立大学等主催の研修会に、3年間で延べ91名が参加し、能力の向上が図られた。</p>
57	<p>・人事交流計画 ○事務職員及び技術職員については、国立大学や高専間などの人事交流を積極的に推進する。</p>	<p>○事務職員及び技術職員については、国立大学や高専間などの人事交流を積極的に推進した。</p>
58	<p>・資産の有効活用方策、IT資産の管理 ○校内ネットワークシステム等の情報基盤を通じた学内情報資産の有効活用および、セキュリティの高いIT資産管理のために、情報セキュリティポリシー等の見直しを、情報セキュリティ推進委員会と情報セキュリティ管理委員会で行う。 ○情報セキュリティ意識向上のために教職員や学生への注意喚起や講習会などを行う。</p>	<p>・資産の有効活用方策、IT資産の管理 ○機構本部が整備する情報格付け等のポリシーをもとに、学内ポリシーの整備を進めており、資産の有効活用と管理を行っている。 ○IT資産管理において運用方法を再検討して適切な運用を行った。 ○機構本部が提供する情報セキュリティに関する教職員向け情報発信等を行った。</p>
<p>2 業務運営の効率化に関する事項</p>		
60	<p>・一般管理費の縮減取組計画 1.一般管理費に係る一括契約を実施するため、校内の複写機の賃貸借及び保守契約を同一メーカーにして5年間一括契約(企画競争や一般競争)実施の検討を図る。 2.会議資料などを両面コピーやNアップ機能を用い2分割や4分割するなど用紙の節減を図る。 3.省エネ製品へ順次切り替えの促進を図る。 4.事務部門のPCのリース化についての検討を図る。</p> <p>・随意契約の見直し状況 ○100万円未満の契約についても、定期的に購入するものや大量に購入するものなどについても、一般競争契約を積極的に取り入れていくこととする。(例:プリンターインクの単価契約やパソコンの契約を学内で取りまとめるなどした一括契約など)</p>	<p>・一般管理費の縮減取組計画 1.一般競争入札により校内の複写機の賃貸借及び保守契約を同一メーカーにして27年度より5年間の一括契約とした。 2.会議資料などを両面コピーやNアップ機能を用い2分割や4分割するなど用紙を節減している。 3.蛍光管からLED管へ切り替えを行うなど、省エネ製品へ順次切り替え促進中である。 4.事務部門のPCのリース化については引き続き検討中である。 5.昼休み時間(12:15～13:00)の一斉消灯を図り、エアコンの設定温度(夏季:28℃、冬季:19℃)を励行している。 ○平成28年度から、「学術情報ネットワーク(SINET5)アクセス回線接続サービス」の契約について、東海地区5高専で共同調達を行い、経費節減を図った。 ・随意契約の見直し状況 ○新規案件については、一括契約における費用対効果を考慮し、引き続き検討を行っている。 ○電気料金の自由化に伴い、現在、随意契約で行っている電気料の契約方法を見直し、平成29年4月以降に使用する電気について一般競争入札(政府調達)で契約することとした。</p>
<p>3 予算(人件費を含む、収支計画及び資金計画)に関する事項</p>		
61	<p>○文科省を初めとする各省庁の公募事業や科学技術振興機構(JST)並びに日本学術振興会などの公募事業を積極的に申請する。 ○本校において、申請できる外部資金の一覧表を作成し、HPにアップすることと併せて、公募前に教職員への周知徹底を図る。 (例:外部資金の公募前にメールなどにより周知を促す) ○機構本部からの予算を本校の配分方針に基づき、効率的に配分し、効果的で有効な予算執行に努める。 ○収入見込みに沿った計画的な予算執行の推進に努める。 ○授業料等の各収入並びに外部資金等の収入見込を四半期毎に立て、積極的な必要財源の確保を図る。</p>	<p>○各種公募事業に対して積極的に申請した結果、以下のとおり採択された。公募型受託研究3件(うち、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)1件、国立研究開発法人国立環境研究所1件)、公募型共同研究3件、奨学寄附金22件(公募分のみ)等 ○申請できる外部資金の一覧表をHP上に掲載し、周知徹底を図った。 ○本校の予算配分方針に基づき、効率的に予算配分を行った。</p>

書面による評価方法

① 以下の「考え方」を目安に、「達成状況を示す記述」を用いて、目的の達成状況を5段階で評価・記載してください。

評価	考え方
5；非常に優れている	取組状況や活動状況が優れており、目的に照らして全体の達成状況が非常に優れていると判断される場合
4；良好である	取組状況や活動状況が優れており、目的に照らして全体の達成状況が良好であると判断される場合
3；おおむね良好である	取組状況や活動状況に改善すべきところはあるが、目的に照らして全体の達成状況がおおむね良好であると判断される場合
2；不十分である	取組状況や活動状況に問題があり、目的に照らして全体の達成状況が不十分であると判断される場合
1；判断保留	記述が不明瞭で取組や活動の状況に不明な点がある場合で、分析できない場合

② 該当項目についてコメントがあれば、記載してください。

評価表

【評価】 5；優れている 4；良好である 3；おおむね良好である 2；不十分である 1；判断保留

項目	大貝	野々村	村井	石川	柏田	古川	大野	コメント
	評価	評価	評価	評価	評価	評価	評価	
1 業務の質向上に関する事項								
1-1 教育に関する事項								
1-1-1 各学科・専攻科の目標	4	4	4	5	3	5	4	<p>【大貝】全体として良好と判断するものの、学科間での実施報告の記述内容の疎密が見られる点気になる。</p> <p>【野々村】海外インターンシップ、創造工学演習等が高く評価できる。</p> <p>【柏田】各学科・専攻科とも充実したカリキュラムが組みられていると思う。あえて指摘するなら、人文科目系、中でも歴史などの充実がより図られるなら、文理両面で人材育成の幅が広がると考える。</p> <p>【古川】教養課程をある程度1、2年生に集中させてはどうか。</p> <p>【大野】コミュニケーション能力の向上の取組みや論述課題により、具体的な取組みを学生に進めている点。外部と積極的に連携し、質向上に努めている点。学生主体の問題解決能力の育成を行った点が評価出来る。</p>
1-1-2 入学者確保に関する事項	3	5	5	5	4	5	3	<p>【野々村】女子学生獲得に敵であり、評価出来る。</p> <p>【村井】岐阜県中学校長会としてお礼申し上げる。</p> <p>【柏田】アピールポイントが伝わる。</p> <p>【古川】推薦入学の枠が多すぎるのではないかと。</p>
1-1-3 教育課程の編成等に関する事項	3	4	5	5	4	5	3	<p>【大貝】項目14は素晴らしい成果であるが、項目10に「新教育課程の検討、平成28年度に完成」とあるが、これに関する実施報告の記述がない。</p> <p>【村井】本科・専攻科ともに特色ある教育課程が編成されている。</p> <p>【柏田】英語力向上では、高専の先生監修の「コセット」という理工系学生向け英単語集が有益と聞いています。グローバルな人材育成を期待します。</p> <p>【大野】・ICT活用環境整備した点・民間企業との連携・英語力強化のための取組み・学外での活動（大会）への積極的な参加などの改革が進められている。</p>
1-1-4 優れた教員の確保に関する事項	4	4	4	5	4	5	3	<p>【柏田】高いレベルを今後も維持する長期的展開を期待します。</p> <p>【古川】教員の数が足りないのではないかと。得意ではない授業を受け持たざるを得ない教員もいると聞き及びます。</p> <p>【大野】・海外や大学との研修・共同研究の実施や人材交流が行われた点・女性教員の採用拡大を進めている点が評価できる。</p>

1-1-5 教育の質向上及び改善のためのシステム	23 24 25 26 27 28 29 30 31 32	3	5	5	5	4	5	3	<p>【大貝】年度計画の項目に対応した実施報告になっていない。項目29の参加率は維持できたか記述がなく不明。項目30に情報発信とあるが、報告に記述がない。</p> <p>【野々村】ICTを活用した教育の基盤を築いた点が高く評価できる。</p> <p>【村井】特色ある教育実践がなされている。</p> <p>【柏田】過不足のない内容だと評価します。</p> <p>【古川】本科卒論の学会発表を目指す。</p>
1-1-6 学生支援・生活支援等に関する事項	33 34 35 36	4	3	4	4	4	5	3	<p>【野々村】指導教員等の見守り体制をさらに強化すると良い</p> <p>【柏田】非常に風通しのよい校風と聞いています。少子化のなか、主体性を育むためのより充実した環境作りを期待します。</p> <p>【古川】寮におけるいい意味での上下関係の構築を図る。</p>
1-1-7 教育環境の整備・活用に関する事項	37 38 39 40 41	3	4	4	5	4	5	3	<p>【大貝】女性教員の優先的採用を推進した結果、3年間で何名の女性教員が新たに着任したか、女性比率はどの程度アップしたなど、具体的記述がほしい。</p> <p>【柏田】アクティブラーニングは今後一層重要になるテーマで、更なる充実を望みます。</p>
1-2 研究や社会連携に関する事項	42 43 44 45 46	4	4	5	5	4	5	3	<p>【野々村】地域連携協会等を活用した取組が評価できる。</p> <p>【石川】地方公共団体としての連携において、十分な支援をして頂いている。</p> <p>【柏田】十分な取組と評価します。</p> <p>【古川】卒業生の積極的な活用を図る。</p>
1-3 国際交流に関する事項	47 48 49 50	5	4	4	5	3	5	3	<p>【野々村】短期留学等を活用して日本人学生の国際化教育を確実に進めている。</p> <p>【柏田】真のグローバルな人材を育成するため、国内の歴史や文化を踏まえた上で交流を図ることが望まれます。</p>
1-4 管理運営に関する事項	51 52 53 54 55 56 57 58 59	4	3	4	5	4	5	3	<p>【野々村】今後は留学生に対する情報セキュリティも重要になると考える。</p>
2 業務運営の効率化に関する事項	60	4	3	4	5	4	5	3	
3 予算に関する事項	61	4	5	4	5	4	5	3	
4 その他主務省令で定める業務運営に関する事項									
4-1 施設及び設備に関する事項	62								
4-2 人事に関する計画	63								
全 般		<p>【大貝】実施報告の記述は、計画を実施したという記述に加え、実施したことによるアウトカムを明確に示すことで、評価は4または5となると考えます。しかし、多くの報告が実施したという記述に留まっており、この点を改善する努力をお願いしたいと思います。</p>							

岐阜工業高等専門学校参与会規程

制定 平成16年8月25日
学校規則第38号

(設置)

第1条 岐阜工業高等専門学校（以下「本校」という。）に、広く学外有識者の意見を聴くため、参与会を置く。

(任務)

第2条 参与会は、次の各号に掲げる事項について、校長の諮問に応じて審議し、及び校長に対して助言又は勧告を行うものとする。

- 一 本校の教育研究上の目的を達成するための基本的な計画に関する事項
- 二 本校の教育研究活動等の状況について本校が行う自己点検・評価に関する事項
- 三 その他本校の運営に関する事項

(組織)

第3条 参与会は、次の各号に掲げる参与若干名で組織する。

- 一 大学又は高等専門学校等の教育研究機関の教員等
- 二 産業・経済界の関係者
- 三 本校の所在する地域の関係者
- 四 本校を卒業又は修了した者
- 五 その他高等専門学校に関し広くかつ高い識見を有する者

(委嘱)

第4条 参与は、校長が委嘱する。

(任期)

第5条 参与の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前項の参与に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長及び副会長)

第6条 参与会に会長及び副会長を置き、それぞれ委員の互選とする。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代行する。

(運営)

第7条 参与会の会議は、校長が招集し、会長がその議長となる。

(庶務)

第8条 参与会の庶務は、総務課において処理する。

附 則

1 この規程は、平成16年8月25日から施行する。

2 岐阜工業高等専門学校有識者との懇話会要綱（平成13年12月5日校長裁定）は、廃止する。

附 則（平成19年学校規則第29号）

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則（平成25年学校規則第8号）

この規程は、平成25年4月1日から施行する。